
月読の奏

南爪縮也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月読の奏

【Nコード】

N8317W

【作者名】

南爪縮也

【あらすじ】

驚異的な科学技術を要し、高度な発展を遂げる王国アダムズ。そんな王国に突如として出現した【ヤツ】と呼ばれる人外の化け物の脅威に人々は恐怖し、慄いていた。

王国は軍を派兵し、ヤツの討伐に動く。

だが尋常でないヤツの強さに、軍の若き隊士たちは舌を巻いた。それでも決死の覚悟で戦い続ける隊士たち。

多くの犠牲を出しながらも、激闘を戦い抜く隊士たちはあとしどころまでヤツを追い詰めていた……

第一話 更待月の夜戦場

「……全員無事だな」

小隊長のフアラデーは廃墟の壁を背にしながら、月夜に浮かぶ若い隊士一人一人の顔を確認した。

それらの顔には極度の緊張と疲労がうかがえたが、衰えない戦いへの意志も感じられた。

フアラデーは崩れかけた窓から、廃墟の中をゆつくりと覗き込む。薄暗いながらも月明かりが少し差し込んだ廃墟の中は、十分に見渡すことができた。

そしてその中に【ヤツ】の存在を確認した。

微かに震えた声で、静かに発せられるフアラデー小隊長の指示が、インカムを通して隊士たちに届く。

「ジュール、お前はテスラを連れて左側の入り口に向かえ。ヘルツとガウスは裏口だ。俺は正面から行く。配置についたら合図するまで待機しろ。勝負は一瞬だ、気を抜くなよ」

隊士たちの体力はとうに限界を超えていた。若さゆえの気力と集中力でここまで来たのだ。

引き返すことの出来ない状況の中で、若い隊士たちの気持ちを繋ぎ止めるために、フアラデー小隊長は力強く言った。

「ヤツに今までどれだけの仲間が殺されてきたことか。確かにあの強さは異常だ。だがそんなヤツとこれだけ戦いながらも、全員無事なのは決して運が良かっただけじゃない。」

自らにも言い聞かせるように、小隊長は続けた。

「自分達の力を信じるんだ。今確実にヤツを追い詰めている。俺たちならやれる。ヤツを倒すんだ！ この機会を逃したらまた大勢の人がヤツの手にかかるだろう。そんなことは絶対にさせてはいけない」

夕暮れ時に人ごみ溢れる市街地で突然始まったこの戦いは、月の

明かりが輝きを増した頃、人気の無い廃工場に戦場を移し、あと少しというところまでヤツを追い詰めていた。

ただ当初四小隊いた部隊は、今やこの一小隊を残すのみになっていた。

左側の入り口についたジュールは、共に行動しているテスラの顔色の变化に気づき、声をかけた。

「どうしたテスラ。どこか痛むのか。」

「……ジュール。違うんだ、ごめん。僕は怖くてたまらない。」

「心配ない。さっき小隊長が言った通り【ヤツ】を追い詰めているのは俺たちのほうだ。ここまでやれたんだ。お前ならやれる。」

「僕はただ必死にみんなについて来ただけだよ。付いていくことに必死で、周りで大勢の人が傷ついていても気にならなかった。ううん、戦いに集中することで気づかないようにしていたんだ。でもここに来て急に怖くなってしまった……」

ジュールは怯えるテスラに優しく話した。

「怖いのはみんな一緒だ。でももう少しだ。この壁の向こうにヤツがいる。でもヤツは深手を負っているし、かなり消耗しているはずだ。俊敏なヤツの動きに切れがなくなってきたのは明らかだし、フアラデー小隊長の下でみんなが協力し、お互いをカバーし合えば絶対に倒せるはずだ」

同期入隊であり、訓練所時代からの親友であるテスラを、ジュールは温かく励まし続けた。

「自信を持つんだ！ この小隊で一番強いのはお前なんだ。それはみんなも良く分かつるし、頼りにしている。だがもしの時は俺がお前を守ってやる。大丈夫、心配するなテスラ。絶対に死なせやしない。」

「ありがとう、ジュール……」

空元気だが、テスラは強がるように微笑んだ。

ジュールは装備したインカムから全員が無事配置に着いたことを確認し、ファラデーの合図を待った。

（今まで使い物にならなかったインカムが、ここに来てようやく電波が改善されて正常に機能するようになった。俺たちに運も向いてきた。やってやるさ！）

ジュールは刀を強く握り、必死に自分自身に言い聞かせた。

今まさに命懸けの戦闘が始まるうとしている中で、弱気になつているテスラを励ますために強気なことを言ったジュールだが、彼自身もまた、その喉はカラカラに乾き、刀を握るその手の震えは収まることを許さなかった。

気持ちを落ち着かせるため、ジュールは水筒を取り出し水を一口飲んだ。

久々に取った水分が体中に染み渡るのを感じながら、深呼吸をした。

ジュールは、今にも折れそうな心に無理やり蓋を閉め強がる自分とは対照的に、正直に自分の弱さをさらけ出すテスラを少しだけ羨ましく思った。

水筒をテスラに手渡しながら、ゆっくりと入り口の中を覗き込み、深手を負い蹲るヤツの存在を確認した。

額から止め処なく流れる汗を拭いながら、ファラデー小隊長の指示を待つ。

インカムからはヤツの様子を伺い、突入のタイミングを図るファラデーの小さい呼吸だけが聞こえていた。

周囲に緊張が走る。

ジュールは再度ヤツを確認するため、廃墟の中を覗き込もうとした。

「カラン……」
後方より無機質な音が鳴った。

ジュールは振り向き、音の鳴った場所を見た。

そこには水筒を地面に落とし、血の気の引いた顔をしているテス

ラの姿があつた。

ジュールはすぐ様振り返り、廃墟の中を見た。
にヤツの姿は無かつた。

だがそこ

「全員後方に下がれ！」

フララデー小隊長は小銃を抜きながら叫んだ。
そんなフララデーを突然影が包んだ。

ゾツとした彼が振り向いたそこには、人の形はしているものの、
3 m程の巨体全てを黒毛で覆い【腐った豚】のような顔を持つヤツ
が、月明かりを背にして立っていた。

フララデーはヤツに向け、小銃の引き金を引いた。

「ドサツ」

小銃の発射音とは明らかに異なる、重く鈍い音が足元から聞こえ
た。

小銃を構えたままのその右腕は、根元から千切れ地に落ちていた。
「おおおお」

フララデーは苦痛に顔を歪めながらも、残された左腕で刀を抜き
ヤツに切りかかった。

ヤツはその一撃をかわすと、そのままフララデーの背後に素早く
回り込んだ。

「やめろーっ」

ジュールがそう叫ぶのと同時にヤツは、鋭い爪を持つその右腕を
フララデーの背中めがけて突き立てた。

一瞬時間が止まったかのように凍りついた。

月の光に照らされたフララデー小隊長の体は、人の3倍はあろう
太いやツの腕に貫かれ、奇妙に折れ曲がっていた。

「うああああああ」

屍餅をつきながら叫ぶテスラの悲鳴が、廃墟と化している工場に
響き渡る。

混乱したジュールは何が起きたのか現状を把握することができず、ただフラデーと、その体を背中から無造作に貫くヤツの姿を見ていることしかできなかった。

「……しょ、小隊っ。何をしている。今は作戦中だっ！ 目標を叩けっ！！」

フラデーは薄れ行く意識の中で、血を吐きながら懸命に叫んだ。「ジュールっ、お前はつくよ」ギヤオオオオオオっ！」

フラデーの言葉を遮り、爆発音のような巨大な叫び声を上げたヤツは、躊躇なくその首をはねた。

凍りついていた時間が高速で動き出す。

「ヘルツ！ ガウス！ 戦闘隊形【ホーネット】正面からヤツを叩き潰す！」

ヤツがフラデーの首を落としたことが、逆にジュールを冷静にさせた。

ジュールは無残にも切り落とされたフラデーの首を見えることで、ヤツに対する憎しみが増大し、その感情が必ずヤツを倒すという戦闘における集中力を高めることになった。

咄嗟に放ったジュールの指示に対し、即座に反応するヘルツとガウス。

二人はジュールより歳下であり軍における階級も下であったが、幾度の作戦を共にしてきたジュールの指示に対し、自然と体が反応した。

ジュールは拳大の黄色い玉をヤツに向け投げつける。

さらに小銃を両手に素早く構えると、ヤツに向け鉛玉を浴びせた。放たれた銃弾の一発が、先に投げられた黄色い玉に当たった。

玉は空中で弾け、激しい閃光が周囲を包んだ。

ヤツはたまらず目を押さえながら引き下がる。左足に深手を負っている状態にもかかわらず、小隊長の体を盾にしながら、ヤツは右足一本で10m後ろにある崩れかけた塀の影まで飛んだ。

そんなヤツに、抜刀したヘルツが猛然と走り込む。

ホーネットは敵に対し、複数人が一直線に連続攻撃を加える戦術だ。

小隊一俊足のヘルツは、裏口から一気に廢墟を走り抜け、さらに後方に飛んでいるヤツが地面に着地する前に切りかった。

だがその瞬間、ヘルツは大きくはじけ飛んだ。

ヤツは右腕に刺さっていたままの小隊長の体を力任せにヘルツに向け投げ捨てたのだ。

小隊長の体と共に吹き飛ぶヘルツ。それでも吹き飛びながら小銃を1発放った。

銃弾はヤツの右足に当たり、体勢を崩した。

そこに二番手として小隊一怪力のガウスが駆け込み、ヤツの頭部を渾身の力で切りつけた。

ヤツは素早く反転し、その攻撃を背中で受けた。

「痛っ！　なんて硬い体してやがるっ」

ガウスの太刀は確実にヤツを捕らえたが、背中を覆う鉄のような硬い肉に押し返えされた。

振り向き様に繰り出すヤツの反撃の拳を紙一重でかわし、痺れを感じる自らの腕に構うことなく、ガウスは全体重を刀に乗せもう一太刀を上段から振り下ろした。

「獲った！」

勝利の笑みを浮かべたのもつかの間、ガウスの顔は一瞬で青冷める。

無情にも鎖骨の辺りで切りつけた刀は折れていた。

「グオオオオオオっ！」

ヤツは衝撃波のような叫び声をあげせ、ガウスに向け右拳を振り下ろした。

「ダーン！」

遠く後方から銃声が聞こえ、それと同時にやつは激しく体勢を崩した。

そこに三番手のジュールが刀を抜き飛びかかる。

ジュールの繰り出した突きは、ヤツの防御より早く、その左目を貫いた。

叫び声を上げ大きくのけ反りながらも、ヤツは左腕で強引にジュールをなぎ払おうとした。

額をかすめながらもヤツの腕をかわしたジュールは、橙色の玉を取り出し、まだ鎖骨のあたりに刺さったままの折れたガウスの刀めがけて投げた。

玉は刀に当たって炸裂し、ヤツの全身に電撃を走らせた。

ジュールは動きの鈍ったヤツの足に刀を突き刺した。

刀は足の甲を貫き、地面深くまで達した。

「くたばれ！」

ヤツの喉元に小銃を向ける。だがヤツは刀の突き刺さった足に構うことなく、その足でジュールに蹴りを入れた。

「ぐはっ」

吹き飛ぶジュール。だがヤツの足元には拳大の赤色の玉が落ちていた。

ガウスは廃墟の壁に身を隠しながら、その落ちている赤色の玉めがけて小銃を発した。

「ズガアアーン！」

爆発が起こり、辺りは噴煙で立ち込めた。

「これでダメなりや笑うしかないぜ」

ヤツがいたであろう場所を見ながらガウスは呟く。

「ガウス、上だ！」

ジュールの声に反応し、ガウスは咄嗟に身をひるがえした。

鋭い爪を立てた腕を振り下ろし、ヤツが頭上より舞い降りる。

間一髪攻撃を避けたガウスは、そのまま渾身の回し蹴りをヤツの脇腹に浴びせた。

蹴りの入ったその脇腹は、先ほどの爆発で大きく損傷していた。鈍いうめき声を上げながら、ヤツは動きを止めた。

「うおおおつ！」

勝負所と感じたガウスは、その損傷そんしょうしている脇腹めがけ、持てる力全てをつぎ込み鉄甲てつこうをはめた拳を連続で繰り出した。

6発目の打撃を受けたヤツの体は完全に【くの字】になった。

そこを見逃すガウスではない。とどめの一撃をヤツのアゴ目掛けで放つ。

アゴを捕らえたガウスの拳は、そのまま上空に突き抜けた。

が、同時にガウスの体も上空に吹き飛んだ。

ヤツは自らのアゴが跳ねは上げられると同時に、膝蹴りひざげりをガウスのアゴに浴びせていた。

お互いのアゴの砕ける鈍い音がすると共に、ガウスは空中で気を失い、そのまま地面に倒れ込んだ。

完全に足にきているヤツだったが、ふらつきながらも倒れているガウスに近づき左腕を振り上げた。

「ダーン！」

銃弾がヤツの左肩に命中し、そのまま崩れるくずように倒れた。

倒れながら銃弾の飛んできた方向を、ヤツは残された右目で睨んだ。視線の先には小隊一の狙撃の名手マイヤーの姿が小さく確認できた。

100mは離れているであろう、崩れかけた木造の塔の3階にある小さな窓からライフルの銃口がヤツを狙っている。

フラデー小隊長はヤツを追い詰める途中、スナイパーであるマイヤーの特徴を生かすため、あらかじめ戦場の全域が見渡せるこの位置に彼を向かわせていた。

ただマイヤーは先の戦いの中で、ヤツから受けた攻撃により左目を失っていた。

引き金を引く度に気を失いそうになる激痛を顔面に感じ、その左目を覆う包帯おおいは真つ赤に染まっていたが、それでも彼は冷静に狙いを定め、ためらうことなく引き金を引いた。

ライフルから放たれた強弾は、ふらつきながら立ち上がったヤツ

の左こめかみをかすめた。

「左目を失った影響か。弾が少し右にズレる」

マイヤーはヤツから目を離すことなく、冷静に状況を分析しながらライフルに弾を込めた。

「俺に気づいているヤツを、近距離からのサポート無しで死止めるのは不可能だ。どうする……」

常に平静を保ち、ペースを乱したことのない彼であったが、この時ばかりは引き金にかける指先に今まで感じたことのない緊張が走った。

だが突然、ヤツの視線がマイヤーから外れた。

「今だ！」

指先に力を込めようとしたと同時に、信じたくない状況が視界に入り、背中に冷たい汗が一気に溢れる。

ヤツの向けた視線の先には、腰が抜け、ただ呆然と涙を流しているテスラの姿があった。

「何やってんだ、あいつは」

マイヤーはヤツにライフルの照準を合わせながらも、窓から身を乗り出し懸命に叫んだ。

「テスラ立て！ 立って刀を抜くんだ！」

テスラは若いながらも剣の達人だ。その腕は厚さ5ミリの鉄板を平然と切り捨てる程に。

軍のトップである総指令官を父に持ち、幼い頃から剣を叩き込まれた。教えられた技は砂が水を吸ごとく容易に全てを吸収した。まさに天才だ。その上努力家でもあった。決して自分の腕に満足することはなく、日々思考を重ね、更なる極みを目指していた。

そんな国一番の呼び声高い剣の使い手であるテスラだが、同時に国一番の優しい心の持ち主でもあった。

訓練ではまさに神業的な刀さばきを披露していても、普段は虫をも殺せぬ性格だった。

目の前で現実には起きている血まみれの戦いに、彼の心は粉々に崩れていった。

叫ぶマイヤーの声はテスラに届かない。

脇腹を押さえ、足を引きずりながらもヤツは着実にテスラに近づいている。

「テスラ！頼むから立って刀を抜け！ テス……」

マイヤーの目には、30センチはある廃墟の残骸を無造作にかみ、自分めがけて投げつけるヤツの姿が写った。

空気を切り裂く轟音を響かせ、投げられた残骸は一直線にマイヤーに向かった。

向かってくる残骸にライフルの照準を即座に合わせ、弾丸を放った。

弾丸は残骸に命中した。だが粉々になった残骸の破片は、それでも彼に向かった。

「くそ……」

窓から乗り出していた身を必死に塔の壁に隠す。直後に残骸の破片が壁に降りそそぎ、激しい音を立てた。

木造の塔の壁には、無数の風穴がハチの巣のように開いた。

「ヘルツ、動けるか」

ジュールは脇腹を押さえ蹲るヘルツに言った。

「大丈夫だ。肋骨が何本かいったみたいだが問題ない」

そう応えるヘルツの顔色を見る限り、決して無事でないことが分かる。

それでもジュールは指示を出した。

「ヤツの右に走り注意を引け。俺はヤツの死角から攻める。赤玉とガウスの攻撃でヤツの脇腹はボロボロだ。残りの赤玉はあと一つ。

こいつを確実にくらわせるしかもう、ヤツを倒す手段が無い」

「了解。けどジュールさん、あんたこそ大丈夫か。辛そうだぞ」

「お前より一本多くアバラが折れてるだけだ。これ以上ヤツがテス

ラに近づくと赤玉が使えない。行くぞ！」

同時に二人は走り出す。

ヘルツの走りにいつもの速さが無い。

折れた肋骨が肉に食い込み、地面を駆ることに激痛を感じる。

流れ出る鼻血で息ができず、みるみる顔が青冷める。

ヤツはそんなスピードのないヘルツに気づき、彼めがけて廃墟の破片を立て続けに投げつけた。

いくつもの豪速の破片がヘルツに向かう。

そんな追い詰められた極限の状態が、逆にヘルツの才能を開花させた。

集中力を高めた彼は、痛みを無視して一気にスピードを加速させ、襲い来る破片を稲妻のごとくかわした。

そして両手に短刀を握りながら廃墟の壁を利用して、ヤツめがけて大きくジャンプする。

ヤツは人間離れたスピードで向かってくるヘルツをなぎ払うように右腕を振り抜いた。

だがそこにヘルツの姿は無かった。

ヤツがその腕を振るよりも早く地面に着地し、滑り込むようにヤツの股間を潜り抜ける。

そしてヤツの右足にある銃弾を受けた傷跡をめがけ、短刀を突き刺した。

そのままヤツの右側に回りこみ、ヤツの鋭い視線が自分を追っているのを確認すると、わざとヤツの視線が自分から離れないよう、後方にジャンプした。

ヤツは足元にあった1m程の大きな廃墟の残骸を両手で持ち上げ、ヘルツに投げるべく振りかぶった。

その瞬間ヤツの死角である左後方から、左手に小銃を握るジュールが赤玉をヤツの脇腹めがけて投げた。

小銃を赤玉に向ける。

だが突然ジュールに廃墟の残骸が襲い掛かった。

ヘルツに向け残骸を振りかぶったヤツは、その重さに耐えられず、振りかぶった残骸はそのまま後方にいたジュールに向け飛んだ。

「ふざけるなっ」

ジュールは飛んでくる残骸を避けようと横に飛んだが、残骸はジュールの体をかすめ、地面に激突した。

残骸はジュールを軽くかすめただけであつたが、その体を吹き飛ばすには十分だった。

ジュールは数m離れた壁まで飛ばされ、激しく体を打ちつけた。

「くそつたれが……」

左手にあつたはずの小銃も、どこかへ飛ばされていた。

ジュールの姿が吹き飛ぶと同時に、後方に飛んだヘルツは瞬時に向きを変え、ヤツに向け突進した。

一直線に駆けたヘルツは地面に落ちる前の赤玉をつかみ取り、そのまま止まらずヤツに向かつて駆けた。

自らに向け突き出されたヤツの腕をも駆け上がり、そのままの勢いでヤツの顔面にひざ蹴りを入れる。

さらに空中で身をひねり、ヤツの右足に突き刺さっていた短刀に飛び蹴りを入れた。

「ギャー！」

短刀は右足を貫通し、ヤツは悲鳴を上げた。

着地したヘルツはまるでつむじ風のように回転し、ヤツの損傷している脇腹に自らの拳を手首が埋まるまでねじ込んだ。そして腕を引き抜くと同時に、一歩後方へ大きくジャンプした。

ヘルツが拳をねじ込んだヤツのその脇腹には、赤玉がめり込んでいた。

ヘルツは手にしていた最後の短刀を、赤玉めがけて投げた。

が、そのまま静かに倒れた。

まさに疾風迅雷ともいえる華麗な連続攻撃は、大きなダメージをヤツに与えた。だがそれと引き換えにヘルツの足は完全に碎けてい

た。

バランスを崩しながら投げられた短刀は、無情にも赤玉を逸れヤツの腕に刺さった。

「まだまだっ！」

そう気合を入れ直すヘルツだが、彼の足はその意に反し、動くことを拒否した。

ヤツは腕に刺さった短刀を引き抜き、動けないヘルツに対し狙いを定め、ゆっくりと振りかぶった。

「やられる……」

そう感じて目をつぶるヘルツに、突然何かが覆いかぶさった。

「グサッ！」

短刀が肉に突き刺さる音が聞こえ、ヘルツは静かに目を開いた。

そこには自らを覆い隠すジュールの姿があり、その肩には短刀が深く突き刺さっていた。

「ジュールさん！」

「伏せていろっ」

ジュールは起き上がるうとするヘルツを強引に押さえつけた。次の瞬間、

「ダアーン！」

後方よりライフルの発射音がしたのと同時に、赤玉の爆発する轟音が鳴り響いき、周囲はその爆風で吹き飛んだ。

風穴の開いた木造の塔から、血まみれのマイヤーがライフルを構えていた。

大きなダメージを受けつつも、どうにか致命傷を免れたマイヤーは、今にも途切れそうな意識の中で、ぎりぎりまでチャンスを待ち、一瞬の隙を突くように赤玉に向け引き金を引いた。

そして赤玉が爆発したのを確認すると、彼は静かに気を失った。

「……ールさん。すっかりしろ、ジュールさん！」

気を失っていたジュールは、ヘルツの呼びかけで目を覚ましたが、

爆風の衝撃で視界が揺れた。

どうにか五体そろってはいるが、爆発による衝撃と火傷によって全身から発せられる激痛は、意識を保つことに抵抗しながらも、意識を失うことを拒絶した。

「やつ、ヤツは……、ヤツはどうなった……」

力無くヘルツに問うジュールの視線の先には、粉塵の舞う中にぼやけて見える仁王立ちのヤツの影があった。

「やった……、やったのか……」

問いかけとも一人ごとともれぬ言葉を発しながら、ジュールは激痛を堪えて上半身を起こし、影を見据えた。

その影にはまったく動く気配がなかった。

どれくらい時間が経ったのだろうか。

周囲を覆っていた爆発の粉塵が消え、ついにヤツの顔を確認することができた。

その顔をみたジュールとヘルツは愕然とした。

ヤツは生きていた。残されたその右目はまだ光を失っていなかった。

「うおおおおお」

ジュールは肩に突き刺さっている短刀を引き抜きながら、強引に立ち上がるとした。

傷口から噴き出した真っ赤な鮮血は、緑色の制服をみるみる赤黒く染め上げていった。

全身の骨がきしみ、息をするだけで死にそうなダメージを受けているその体で立ち上がったジュール。

その時、彼の体の中で何かが起きていた。

彼の右目は青白い光を放ち、聞こえる鼓動は大地を揺るがすかのようであった。

そんなジュールをただ呆然と見上げるヘルツは、まだ生きてはいるものの、動くことのできないヤツよりも、異様な威圧感を放ちながら無理やり立ち上がった、血と埃まみれのジュールのほうを恐る

しく感じた。

何より青白く光るジュールの右目は、見た者の魂を地獄の底に突き落とす【修羅】^{しゆら}の物に思えた。

「ジュールさん、あんた……」

ヘルツの声を無視して、ついにジュールは走りだした。

邪魔な痛みを置き去りにして、ただヤツに向かい真っ直ぐに走る。そのままヤツに体当たりをすると、力なくその巨体は倒れた。

ジュールはそのまま馬乗りになると、両手で短刀を握り締め、頭上に振り上げた。

「うおおあああ！」

短刀を振り下ろそうとした瞬間、ジュールとヤツの視線が交錯^{くわくかく}した。

ヤツのその眼差^{まなざし}しからは、人に対する異常なまでの恨みや憎しみが感じられたが、それ以上にジュールには何とも言えない哀しみが感じられた。

そしてその哀しみが、なぜかジュールの心に深く突き刺ささり、短刀を振り下ろすことが出来なかった。

「どうしたジュールさん！ 早くヤツに止めをさすんだ！」

ヘルツの声が聞こえたが、ジュールは動けなかった。

「お前は、お前はなぜこんなことをする……」

ジュールはヤツに問いかけた。自分でもなぜそうしたのか分からない。ただ聞かずにはいられなかった。

そんなジュールの問いかけに、ヤツが静かに口を開いた。

「驚^{おどろ}イタナ、キサマ。ツクヨミノ胤裔^{いんえい}力……」

「……………」

唐突の出来事に、ジュールは戸惑^{とまや}う。

「今ハマダ【ツクヨミノカナデ】ヲ、感ジテイナイカ……」

「つく、よ、何？」

驚きと、意味の分からない言葉にジュールは混乱した。

ヤツは馬乗りになっているジュールの体を軽く押し退けた。

ゆつくりと立ち上がるヤツを、ジュールはただ呆然と見つめていた。

そんなジュールにヤツは言った。

「イズレ分カル。オ前ナラ、オ前ニナラ……」

「なっ、何を言ってるんだお前は」

流れる雲が月を隠し、辺りは影に包まれる。

ジュールの言葉にヤツは何も答えなかったが、ただジュールの目を少し見つめた。

その目から訴えかける何かをジュールは感じたが、この時はまだその意味が分からなかった。

ヤツはゆつくりと向きを変え、ボロボロになった体を引きずりながら影の中に消え去ろうとした。

ジュールはただ、静かに去り行くヤツを見ていることしか出来なかった。

「トスっ」

薄暗い影の静寂の中で奇妙な音が鳴り、ヤツの足が止まった。

月を隠していた雲が、ゆつくりと晴れていく。

月明かりによって次第に浮かび上がるヤツの背中に、不気味に光る刀の切っ先が突き出ていた。

次の瞬間、その刀は音も無くヤツの体から引き抜かれ、横一線の閃光が走った。

ヤツの体は後方に倒れ、その反動でジュールの足元に何かが転がってきた。

「！」

そこには切り落とされたヤツの首が転がっていた。

開かれたその目はまだ、自らに起きた事実に気づいていないかのよう見開いていたが、その目の光は完全に失われていた。

ジュールはヤツの体のほうに視線を戻した。

そこには刀を抜いて立っているテスラの姿があった。

ヤツの血を振り払った刀を、静かに鞘さやにしまつてスラにはどこか落ち着きがあり、恐怖で怯おびえるあの面影はどこにも見当たらなかった。

「テスラ、お前……」

ジュールはテスラの放つ、冷たい異様な何かを感じた。

だがそれと同時に別の違和感を感じた。

ふと首の無いヤツの体を見ると、全身の毛が抜けて行き、その大きな体が見るみる縮んでいくのが分かった。

「何だ、どうなっているんだ……」

気がつくと、ヤツの体は人の体になっていた。

そして切り落とされたヤツの首もまた、人のそれに変わっていた。体全身に寒気さむけを覚えながらジュールは力尽ちからつき、その場で気を失った。

夜空から降り注ぐ月の明かりは、ヤツの体から流れ出てできた血溜まりに反射し、終わりを告げた戦場を赤く染め上げていた。

第二話 冴返りのホーム

「ツクヨミノ胤裔ヨ。イズレ分カル。オ前ナラ、オ前ニナラ……」
ヤツは静かに言い放ち、影の中に消えて行く。

「待て！ 待ってくれ」

ジュールは叫びながらその後を追った。

しかしヤツは離れて行くばかりで追いつけない。

「キン……」

甲高い鉄の音が鳴ると共に、横一線の閃光^{せんこう}が走った。

ジュールは追い駆ける足を止めた。

そんな彼の足元に、ヤツの首が転がる。

切り落とされたその首は、みるみると人の首に変化していく。

ジュールは、どこか見覚えのある姿へと変化していくその首から目を離せずにいた。

恐怖で震えるジュール。

見覚え^{みおぼ}があるはずだ。

そう、完全な人のものへと変化したその首は、ジュールの首であつた。

「うあああああ」

飛び起きるジュール。息は荒く、全身に汗を掻^かいていた。

「くそ、またこの夢か……」

あの月夜の戦いからすでに半年が経過していたが、ジュールは同じ夢を数え切れないほど繰り返し見ていた。

すでに日は昇り、活気づく街の音が窓の外から聞こえる。

「めずらしく寝入ってしまったな。それにしても何故あの夢ばかり

何度も見るんだ……」

顔を洗いながら、繰り返し見る夢を思い返した。

右目の奥に少し痛みを感じた。

あの夢を見た後は決まってこうだ。目覚めの悪さから来るものなのだろうか。

軽めの朝食を取りながら、久しぶりの休日についてしか時を忘れ、あの日のことを考え込んでいた。

（ヤツとは一体何なんだ。ヤツの言った言葉の意味は何だ。俺にどんな関係があるんだ）

考えれば考えるほど意味が分からず、ただいたずらに時間だけが過ぎていった。

ジュールはあの日の事を、誰にも言えずにいた。

戦場で気を失い、気が付いたときには病院のベッドの上だった。

体全身を包帯で包んだ彼は、先程と同じ夢を見て目が覚めた。

現実と夢が交錯し、何が本当で何が偽りか分からず頭の中が混乱したが、皮肉にも実の兄の様に慕っていたフアラデー小隊長の葬儀に参列することで、現実を把握することが出来た。

それでもジュールに対するヤツの言葉の意味や、ヤツを冷酷に始末したテスラの姿が脳裏に焼きついたまま離れなかった。

さらにあの戦いについて、不思議なことに軍から何の報告も要求されなかった。

確かに目標としていたヤツを倒し、その目的を達成したわけだが、その過程で多くの市民が犠牲となり、また作戦に従事していた三小隊が全滅し、残った隊も隊長を失い、生き残った隊士もほとんどが瀕死の重傷を負ったという、軍にとって甚大な被害を与えたこの戦闘に対し、何も聞かれないことが余計に彼の心に疑問を抱かせた。

ただ分かっていることは、自分同様に負傷を負ったヘルツ、ガウス、マイヤーの3人についても、何も聞かれていないということ。

そしてあの戦闘の後、初めに駆け付けた後続部隊が一般の部隊ではなく、国王直属の近衛部隊（通称【コルベット】）であり、テスラはそのコルベットと共に事後処理に携わったということだ。

（テスラは何か知っているはずだ）

ジュールはそう確信めいたものを感じていながらも、直接テスラ

に問うことができなかった。

なぜなら、入院中のジュールを見舞いに来たテスラはいつもの優しい彼であり、自分の不外無さを責め続けた。

「ごめん、ジュール」

そう言つて謝るテスラの穢れを感じさせない瞳を見ると、ジュールは何も言えなくなった。

だがテスラが優しい言葉を掛けるほどに、ジュールは戸惑い、複雑な気持ちになった。

「トントン」

扉をノックする音が聞こえた。

「今日俺が休日なのは、誰にも言つてないはずだが……」

どことなく警戒心が強くなっているジュールの気持ちとは裏腹に、呑気な声が聞こえた。

「ジュールさん、ご在宅ですか。 やっぱ居ないか」

久しぶりに聞いたその声が、ジュールに少しだけ元気を与えた。

「ヘルツか、久しぶりだな」

扉を開けるとそこには、半年振りに会うヘルツの姿があった。

「おつ、ラッキー。ジュールさん居てくれたよ」

「足のほうはもう大丈夫みたいだな。散らかってるが、まあ入れよ」

「いや、ここでいいです。 あんま時間無いんで。挨拶に來ただけですから」

「どうかしたのか？」

数ヶ月に及ぶ過酷なりハビリを乗り越えたヘルツの足は、完全に回復していた。

そんな彼は職務に復帰することになり、新たな配属先が決まったことをジュールに伝えに來たのだ。

「とりあえず南部の街【ラングレン】にある軍支部にこれから列車で向かいます。出発時間に余裕が無いんで」

「そうか、ずいぶん急だな。せっかくだから駅まで送るよ。今日は非番だしな」

手早く身支度^{みじたく}を済ませたジュールは、ヘルツと共に駅へ向かった。

昨日まで温かい日が続いていたが、今日に限って今にも雪が降って来そうな、どんよりと曇った空をしていた。

真冬の寒さが身に凍^しみだが、それでも久しぶりに話すヘルツとの会話にジュールは居心地^{いこち}の良さを感じた。

「南部のラングレンなら、だいぶ暖かいだろうな」

「そうでしょうね。この寒さは古傷^{こた}に堪えるし、ちょうど良かったのかも」

「それにしても、あれ程の重傷がよく半年で回復したな」

「へっ、地獄のようなりハビリでしたよ。二度と御免^{ごめん}ですね。でもそれを言うならジュールさん、あんたこそタフですね。俺から見ればあんたの体も相当酷^{ひど}く感じたけど、十日もしないで退院しちゃうんだからなあ」

「……………」

ヘルツの言葉を聞いて、ジュールは歩みを鈍^{にぶ}らせた。

ジュールの体は自分でも信じられない程の早さで回復した。

折れた肋骨に全身の火傷^{やけど}。さらに肩に深く突き刺さった短刀の傷も、目を疑うほどの早さで治っていった。

その異常とも言える回復力の高さもまた、彼を不安にさせる原因の一つになっていた。

「すみません、無神経な事を言ってしまった。気にしてたんですね

……………」

「いや、いいんだ。悪いのは俺のほうだ。最近の俺は頭も無いのに考え過ぎだな」

旅立つヘルツに要らぬ気遣^{きじか}いをさせてしまったことに、ジュールは申し訳なく感じた。

「おーい！」

突然二人を呼ぶ声がした。

振り向くと、青い制服姿のガウスが息を切らせながら走り寄って

来た。

「おうガウス、久しぶりだな」

「ハアハア、ジュールさん、お久しぶりです。ハアハア……、ヘルツも一緒にちょうど良かった」

息を整えつつ、ガウスは言った。

「ヘルツ、お前薄情うすけいじやうだな。今日が出発の日だって、なんで教えないんだ」

「別にこれが一生の別れじゃないんだ。たいした事じゃないだろ」

「バカ野郎！ 入隊以来ずっと一緒にやってきた仲じゃないか。城で会ったテスラさんに言われて知ったんだぞ。とりあえず駅に向かえば追いつくかと思つて急いで来たんだ」

「スマン、悪かったよガウス。城の警備隊に配属されたばかりで何かと忙しいと思つてな。なにより別れ際にお前の阿呆面あほうづら見ると、気分良くこの街から旅立てない気がしたんだ」

「なんだと！」

「まあ二人とも、その辺でいいだろ。これからは別々の道を進むことになるが、お前たちは共に死線をくぐり抜けてきた仲間なんだ。別れのときくらいお互い素直になれよ」

三人は共に経験した軍での思い出話をしながら、駅につくまでの短い時間を楽しんだ。

慌あわただしく人々が行きかう中、中央に大きな女神像が立つ駅前ロータリーに着いたところでガウスが言った。

「俺はここでお別れだ。勤務中に無断で抜けて来てるし、ジュールさんも居ることだしな。ここからタクシーで城に戻るよ。元気でな、ヘルツ」

「ああ、忙しいのに見送りに来てくれてすまなかったな。お前こそ体に気を付けろよ、妻子がいるお前の身に何かあれば、お前一人の問題じゃ済まないんだからな」

「実は女房の腹ん中にもう一人いるんだ。家族つてもんは良いもんだけ。お前も南国でいい嫁見つけれよ！」

「心配しなくても、とびつきりの美人と一緒になつてやるぜ。後で腰抜かすなよ」

「そう言えばジュールさん。春にはあんたも所帯持ちだな。うちのと違つて綺麗な奥さんで羨ましいいぜ」

「煽てるなよガウス」

ジュールは少し顔を赤らめながら二人に言つた。

「お前の時ほどじゃないが、ささやかだけど式は上げるつもりだ。その時は当然二人も呼ぶつもりだから来てくれよ」

「楽しみだな。じゃあ次に再会するのは春か。案外早いな」

「そう思うと、なんだかお別れムードもしらけてくるな。じゃあな、ヘルツ。」

簡単な別れの言葉を口にし、ガウスはその場を去つていった。

アダムズ王国。

驚異的な科学立国として知られるこの国は、隣接する国々よりも遙かに豊かであり、また活気に満ち溢れていた。

【首都ルヴェリエ】の中心には、現国王であるアルベルト王の住む強大なアダムズ城がそびえ立ち、その城下町にあるアダムズ中央駅は国最大の駅であり、全ての列車の始発駅として溢れんばかりの人数でごみで賑わっていた。

「フアラデー小隊もバラバラになつちやいましたね。俺、結構気に入つてただけどなあ」

ホームに着いたヘルツは、少しの間見納めになるアダムズ城を遠目に眺めながら、思い出に浸るように言つた。

小隊長であるフアラデーが殉職したことで、その後の隊士たちの回復に時間差があつたこともあり、小隊は完全に解散していた。

家族を持つガウスは、もとより希望していた比較的勤務条件が容易なアダムス城の警備隊に配属された。

マイヤーは彼自身が小隊長となり、部隊を指揮する立場として東部の街へ向かつた。

テスラは国王直属近衛部隊コルベットに配属。そしてジュールは軍総指令直轄戦闘部隊「トランザム」に配属されていた。

「それにしてもジュールさんとテスラさんは凄いな！ その若さでそれぞれ軍の最高部隊に配属されたんだから。何だか俺も鼻高いつすよ。ファラデー隊長もきつと喜んでるはずです」

その言葉にジュールは軽く微笑んだ。しかし心の中では反対に、この配属にも疑問を感じていた。

コルベットとトランザム。王国の双壁を成す最強の二部隊ではあるが、その実態は犬猿の仲であり、いつ衝突してもおかしくないほどの険悪な状況に置かれていた。

これはアルベルト国王とテスラの実父である総司令アイザックの関係悪化によるものとされ、さらに皇太子であるトーマス王子がアイザック総司令と親密な関係であることが、状況をさらに複雑にさせていた。

何よりジュールは、テスラ自身が父の指揮するトランザムでなく、あいたい相対するコルベットに所属したことが気になって仕方なかった。

（テスラとアイザック総司令の関係は良好なはず。だがあの戦い以来、何かは分らないがテスラは変だ……）

ホームにはすでに、白い蒸気をもうもうと上げ、出発の準備が整っている列車があった。

「ジュールさん」

考え込むジュールの顔を心配そうに見つめながら、ヘルツは言った。

「ジュールさんは早々に退院しちゃったし、その後すぐにトランザムに配属されて全然機会がなくて……」

雑音でざわめき立つホームで、別れ際に突然切り出したヘルツの言葉に、ジュールは耳を傾けた。

「このままずっと自分の胸にしまっておこうと思った。とても現実とは思えなかった。何度も夢であってほしいと願った。でもあの出来事は真実で……」

ヘルツはぐつと唇を噛み締めた。

彼もまたジュールと同じく、あの日から胸にしまい続け、今まで誰にも言えずにいた事があった。

「ジュールさん、やっぱりあんなただけには話しておきたいことがあるんです」

そして一呼吸おき、覚悟を決めたようにヘルツは話し出した。

「ヤツとの戦いが終わった後、俺もジュールさんと同じように力尽き、気を失ってしまった。でもあんなに意識を無くした後で、コルベットが到着するまでの短い時間に起きた事を、俺ははつきりと覚えてる」

ざわめく駅の騒音にかき消されることなく、ジュールの耳にはヘルツの話す言葉だけが鮮明に聞こえた。

あの戦場でテスラがヤツの首を跳ね、その姿が人のものに変化するのを確認したのとほぼ同時に、ジュールは気を失った。

それを見ていたヘルツは声すら出すことも出来ず、終わりを告げた戦場をただ呆然と見ていた。

そんな彼の体も、激闘の影響で全身に激痛が走り、意識が途切れそうになった。

だがその時、月明かりに照らされたジュールの体は、一瞬銀色の輝きを放った。

「何だ……」

ヘルツは激痛に耐えながらも、目を凝らしてジュールの体を見た。赤玉の爆風からヘルツを庇った時の衝撃で、ジュールの背中は焼けただれ、ボロボロのはずであった。

そして短刀を引き抜いた肩の傷からは、とめどなく赤い血が流れ出ていたはずだった。

しかしヘルツが見たジュールの背中には傷跡一つ無く、また肩から流れ出る血は完全に止まっていた。

「目の錯覚か……いや、そんなはずは。うっ……」

悲鳴を上げる体に、ヘルツは一瞬気を失いそうになる。

必死に痛みを堪えながら目を開けると、いつの間にかジュールの横にテスラが立っていた。

ジュールを見つめるテスラの眼差しから、どこことなく違和感を感じたヘルツ。

それでもこの後、テスラは瀕死のジュールを介抱するものと、ヘルツは疑わなかった。

「えっ……」

テスラは静かに刀を鞘から抜いた。

そしてその刀を逆手に持ち直すと、自らの顔の高さに構えた。

刀の向け先は間違いなくジュールであり、その刀は月明かりを浴びて怪しく輝いていた。

「なっ、何をしているんだ、テスラさん！」

必死に止めようと叫ぶヘルツ。

その声を見無視するかのように、テスラは静かに言った。

「ごめんね、ジュール」

「やめるんだ、テスラさん！ やめろっ！――」

ヘルツの叫ぶ制止の言葉は意味を成さず、テスラは刀をジュールに向け振り下ろす。

だがその瞬間、

「ズガガガン」

突如として発生した猛烈な突き上げられる衝撃によって、大地は大きく揺れた。

体勢を崩したテスラの刀は軌道を逸れ、ジュールの体を外し地面に突き刺さった。

揺れが収まり、ジュールの無事を確認すると、ヘルツはほっと胸を撫で下ろした。

しかし次の瞬間、ヘルツは今まで感じたことのない、すさまじい殺気を全身で感じた。

恐る恐る振り返り、殺気を感じる場所に視線を向けた。

廃工場の屋根の上に、月を背にした【ヤツ】の姿があった。

現れたヤツは全身を銀色に輝く毛で覆う、精悍な【狼の顔】をした姿であり、その背中には巨大な翼を持っていた。そして大地から刀を引き抜くテスラを睨みつけるその右目は、地獄の炎のように真っ赤に輝いていた。

そんなヤツからヘルツは目が離せなかった。どこか気品漂う、銀色に輝くその美しい姿に見とれていた。

気づくと不思議なことに、纏わり付くようなおぞましい殺気は消え、代わりに深い愛情から生まれる安らぎのような温かい感覚を感じていた。

ヤツはジュールを見ていた。その眼差しはとても優しいものだった。そしてどこか哀しいものでもあった。

「ダダダダダッ！」

後方から激しいマシンガンの銃声が鳴り響き、数え切れない銃弾がヤツに向け飛んだ。

ヤツは巨大な翼を広げ、悠然と夜空に飛び立ち銃弾をかわした。
「現れたぞ【ラヴォアジエ】だっ！ 逃がすな！」

黒い制服に身を包んだ九人の兵士が現れた。

そう、彼らは国王直属の近衛部隊コルベットの隊士たちだった。
アダムズ王国の誇る最新の装備を武装した彼らは、人間とは思えないスピードで走りラヴォアジエと呼ぶヤツを追った。

強力なナパーム弾やビーム砲が発射されたが、ヤツは容易にそれらをかわした。

ヤツは攻撃を仕掛けるコルベットをあざ笑うかのように、上空を優雅に旋回していたが、突然向きを変え急降下をはじめた。

ヤツの目指す先にはテスラがいた。

凄まじいスピードで向かってくるヤツに対し、テスラは冷静に居合いの体勢で待ち構える。

「ガキンッ」

二人が交錯するのと同時に、鈍い鉄の音が鳴った。

テスラの刀は粉々に砕かれ、その体は数メートル吹き飛ばされた。
ヤツはそのままの勢いで上空に舞い上がるうとした。が、

巨大な翼の一枚が切り落とされていた。

飛立つことの出来ないヤツは大地を転がり、廃工場の壁をなぎ倒しながらようやくその体を止めた。

粉々に舞い散った刀の破片が月明かりに反射し、周囲を幻想的(げんそう)な風景に仕立て上げていた。

ヘルツは、目の前で起きている現実とは思えない出来事に言葉を失った。

「チャンスだ！ 戦闘隊形【アントリオン】 チームは弾が尽きるまでラヴオアジエを打ち続ける！ チームは【プラズマ・トマホーク】の準備を即座(そくさ)に整えろ」

隊長らしき人物の指示が飛び、コルベットは一糸(いっし)乱れることなく作戦を遂行する。

前後左右から、翼の切り裂かれたラヴオアジエと呼ぶヤツを取り囲み、ガトリング砲による一斉射撃が始まった。

轟音(ごうおん)を響かせ、数万の弾丸がヤツに向け打ち続けられる。

その攻撃に対し、ヤツは自身の周囲に目に見えない球体状のバリアを形成して身を守った。

「あれが【迦具土(かぐつち)】の力か。だがその力も永久なものではない。打ち続けるんだ！」

鳴り止まぬ発射音で襲い掛かる数多の強弾は、着実にヤツを追い詰めていく。

ヤツの張る迦具土(かぐつち)と呼ばれるバリアは、徐々にではあるが確実に小さくなっていった。

しかし撃ち続けるガトリング砲にも変化が表れ始める。

銃身は次第に赤々と色づき、白煙を上げた。

そして四方向からの攻撃の内、弾が尽きたことと銃が破損したことで、二方向の攻撃が停止した。その時、

「プラズマ・トマホーク、放てっ！」

ガトリング砲での攻撃の間、ヤツの四方に人の身丈ほどの金属の支柱が大地に突き立てられていた。

隊長の攻撃命令が下ると、ヤツを中心に支柱同士が電極となり、凄まじい高圧放電が発せられた。

「グギヤアアア」

迦具土は消え去り、もろに電撃を受け絶叫するラヴオアジエ。

それでもヤツは電撃に耐えながら、何処どこからともなく小さな白い玉を取り出した。

「何をするつもりか分かんが、そのまま放電を続ける！」

コルベットの隊長は攻撃の続行を指示し、ヤツの仕草を注意深く監視しながらビーム砲を構えた。

ヤツは電撃を受け続けながらも、赤い目を鋭く光らせると、取り出したその白い玉を勢いよく地面に押しつけた。

「ビキーン」

鼓膜こまくを突き破るような高周波の衝撃が、ヤツを取り囲む者全員の脳に直接響き、同時にプラズマ・トマホークからの放電が止まった。突然の衝撃で一瞬気が遠のいたコルベットの隊士たちは、膝をつき攻撃の手を止めた。

その中でコルベットの隊長だけは、必死に衝撃に耐え、ヤツに向けて構えていたビーム砲の引き金を引いた。

だがどう言う分けかビーム砲は機能せず、発射されなかった。

「ヤツめ、電子兵器の制御を狂わせたのか。ならば！」

隊長は背中に背負っていた長刀を抜き放ち、ヤツに向けて瞬足に駆け出した。

「対ラヴオアジエ用に開発された大刀【十拳封神剣】とつかふうじんけんが一つ、モデル【天乃尾刃張】あまのおのははり、その威力いりよくその体で思い知れ！」

猛然とヤツに詰め寄る隊長。構えた長刀は不気味に紫色の光を放つ。

「グオオオオっ！」

向かってくるコルベットの隊長をその赤い目で睨みながら、ヤツは低い唸り声うなを上げた。

もう一步というところまで隊長が近づいた瞬間、突如ヤツの体を業火^{いっぴか}が包んだ。

炎に構わず、隊長は長刀天乃尾刃張^{あまのおはばり}をヤツめがけて振り抜いた。真っ二つに切り裂かれる炎。

だがそこにヤツの姿は無かった。

「どこだ！」

隊長が頭上を見上げると、炎の塊^{かたまり}が天高く舞い上がっていた。夜空に浮かんだ炎の塊は、そのまま空中で形を変え、再び翼の蘇^{よみが}えったラヴオアジエの姿になった。

「くそつ、【火之夜藝^{ひのやぎ}】の力が……」

そう呟^{つぶや}くと、隊長は力なく倒れ込んだ。

空中に留まりながらそれを確認したラヴオアジエは、視線を他に移した。

視線の先には【ジュール】の姿があった。

名残惜^{なごり}しそうにその姿を見つめるラヴオアジエ。

「ダダダダダッ」

そこに息を吹き返したコルベットの隊士たちが、マシンガンで攻撃を仕掛けてきた。

ヤツは攻撃をかわしつつ、蘇えった翼を羽ばたかせ、そのまま夜空の彼方^{かなた}へ飛んでいった。

現実離れた目の前の出来事に、ヘルツは全身の痛みも忘れ、ただヤツが消え去った空を見続けていた。

そしていつの間にか、眠るように意識を失っていた。

ヘルツの話聞き、ジュールは息を飲んだ。

「信じられないかもしれないが、今話したことは本当です。痛みで何度も気を失いそうにたっただけ、あの時現れたヤツの姿は、今でも鮮明に思い出すことができる」

そう言うヘルツの目が、嘘でないことを物語っている。

ヘルツの話を聞いたジュールは、完全に言葉を失っていた。

そして右目の奥に感じている痛みが、ズキズキと強さを増していた。

「でもねジュールさん。今日あんたに会って一つ分かったことがある……」

ヘルツは黙^{だま}り込むジュールに続けた。

「正直あの日以来、あんたに会うのが恐かった。あのラヴオアジエと呼ばれるヤツが、あんたを見る目は特別なものに思えた。それに俺たちと戦ったヤツが最後にジュールさんに言ったあの言葉……。何だかジュールさんが俺たちと違ったものになってしまっくんじやないか、そう思えて仕方^{しかた}なかった。ジュールさんの体、ボロボロでも動ける状態じゃなかった。それなのに起き上がって、走り出して。動けないでいるヤツよりも、敵であるはずのヤツよりも、あの時のジュールさんはとても恐しく思えて。それにあの光る右目は……」

ヘルツは、胸に詰まっていた思いを吐き出すように、一気に話した。

「だから出発の日の今日、最後にあんたの顔を一目見て、あんたと話をして、あの日感じたことを、今もまだ感じてしまうのか確かめなかった。あんたが本当に変わってしまったのか確かめたかった。そして分かった」

ヘルツはにっこりと微笑んだ。

「ジュールさん。あんたは何も変わっていない。やっぱりあんたは俺の知っているジュールさんその人だ。少し体は頑丈^{がんじょう}になったかもしれないが、あんたから伝わってくる感じは何もかわっていない。」

俺は頭悪いけど、ガキの頃から不思議と勘^{かん}を外したことがない」

汽笛^{きてき}が鳴り、間もなく列車が発車することが、流れてくるアナウンスで告げられる。

「困ったことがあれば俺に声をかけろって、いつもジュールさん言っていたよ。でもねジュールさん。あんたの方こそ、何か気になることがあったら、自分一人で抱え込まずに、俺たちに相談してく

ださい。みんなあんたの事を心配しています。東部に向かう前、俺の見舞いに来たマイヤーさんはジュールさんの事をすごく気にかけていました。口には出さないけど、ガウスだって同じです。あいつは顔を見ればすぐに分かる。それに、さっき俺とガウスに言いましたよね。俺たちは共に死線をくぐり抜けて来た仲間だって」

「ヘルツ、お前……」

「ヤツが言った言葉の意味は分からない。それにラヴォアジエのあの眼差しの意味することも知らない。だけどジュールさんはジュールさんだ。たとえあんたが何者であろうと、俺は、俺たちはあんたの味方だ。戦場ではいつも先頭に立ち、誰よりも危険に身をさらして、俺たちを守ってきた。危なっかしくて見てられなかったけど、追いかけるジュールさんの背中では心強く、どんなに苦しい時でも、進むべき道を示してくれた」

ジュールから目を離すことなく、ヘルツは話続けた。

「それにジュールさん、あんたはその身を犠牲にして俺を守ってくれた。俺にとってあんたは命の恩人だ。それは紛れも無い真実だし、俺のあんたに対する信頼と感謝の気持ちは揺ぎ無いものです。あんたは俺にとって誰よりも輝いて見える、憧れの存在だ。それはこの先もずっと変わりはないでしょう」

ヘルツは今にも溢れ出そうな涙を、その瞳に浮かべていた。

「苦しみに耐え続け、無理やり前に踏み出すばかりじゃ、この先とても正気を保ってなんかいられやしない。だからこそ、悩みがあるなら相談して欲しい。自分一人で抱え込まないで欲しい。あんたも【人間】なんだ。この先も変わらず、ずっと俺の目標であってほしい。だから……」

声を詰まらせたヘルツの目からは、大粒の涙がこぼれ落ちていた。

「ありがとう、ヘルツ」

ジュールは、心の底から感謝の言葉を述べた。

ヘルツが必死に打ち明けたその思いは、ジュールの心に十分過ぎるほど沁み渡った。

「お前こそ、ラングレンに行って何かあれば、すぐ俺に相談しろよ」
ジュールは微笑み、ヘルツに優しく言った。

「その笑顔が見れて、安心です」

出発を知らせる汽笛が鳴り、ヘルツは列車に乗り込んだ。

「もつともつと腕を磨いて、いつか俺もトランザムに行きます。それまで待つててください」

「ああ、楽しみに待つてるよ。お前の強さなら、すぐに来れるさ！」
再度汽笛が鳴り、列車はゆっくりと走り出す。

列車の窓を開け、ヘルツは最後に言った。

「お元気で、また春に会いましょう。それと……」
少しためらったが、ヘルツは続けた。

「テストさんには気をつけてください。あの人からは、よく分からないけど違和感を感じます。表面上は以前と変わらないけど、あの日ジュールさんに刀を向けたこと、そしてコルベットに入ったこと

……」

言葉に詰まるヘルツの思いに、ジュールは優しくも力強く答えた。
「分かった。大丈夫、心配するな。確かにテストのことは俺も気懸^{きが}かりだが、あいつも俺たちの仲間だ。あいつが何を考えているのかは分からないが、近い内にちゃんと話してみる。何かあればお前たちと相談するさ」

列車は走るスピードを徐々に上げ、小走りで走るジュールとヘルツの距離をあけた。

「ありがとうヘルツ、全て話してくれて。元気でな、また会おう」

「ジュールさんこそ、お元気で！ 結婚式、楽しみにしてます！」

ヘルツは走る列車の窓から身を乗り出し、敬礼をした。

それに応えるよう、立ち止まったジュールも敬礼をした。

いつの間にか、右目の痛みが引いていることにジュールは気付いていた。

どんよりとした曇り空の下、粉雪が舞い降り始めていた。

走り去る列車を見えなくなるまで眺め、友との別れに一抹の寂しさ^{いちまつ}を覚えていたが、それでも何故かジュールの気持ちは少し晴れた気分だった。

ヘルツから聞いた話を少し思い返した。

ラヴォアジエと呼ばれるヤツが、自分に対してなぜ優しくも哀しい眼差しを向けたのか。その理由はまったく分からなかったが、なぜかジュールは安らぎを感じた。

「けっこう降って来たな。この感じだと、だいぶ積もりそうだな」
ジュールは次第に強まる雪を見ながら、帰り路につこうとした。その時、

「ジュール。ジュールじゃないか」

人ごみの消えたホームで、一人の老人がジュールに声をかけた。

「あっ、グラム博士」

真っ白い髭^{ひげ}をたくわえた小柄^{こがら}なその老人は、微笑みながら、ゆっくりとジュールに近づいて来た。

第三話 霞色の神話

ジュールは不意に現れた老人に少し戸惑ったが、その表情は親しみて綻んでいた。

「お久しぶりです【グラム博士】、元気そうですねによりです。でも昼間からこんな人目の付く場所に出歩いてちやまずいですよ。もっと自分の立場を弁えて下さい」

「いやいや、ラングレンから古い馴染みが来ていてな。そいつを見送っていたところじゃよ。それに穴倉に籠ってばかりじゃ息苦しくうて敵わんよ。そう言うお前こそ、こんな所でどうしたんじゃ」

「ヘルツがラングレンに転勤になったんで、それを見送りに来てたんです」

「ほう、あの駆けつこの早い小僧がのう。仕事とは言え、付き合いが長かっただけに残念じゃな。」

「ええ。でもあいつなら何処に行っても一人でやっていけるはずですよ」

「そうじゃな。ところでジュール、お前今日は暇か？ 久しぶりの再会じゃ、暇なら少し付き合わんか」

「別に構いませんが、俺一応軍の人間なんで。誰かにお尋ね者の博士と一緒にいるの見られると、あんまり具合良くないから、どこか人目の付かない場所へ行きましょう」

二人は足早にタクシー乗り場へ向かったが、あいにく行列ができていた。

行列の最後尾にならびながら、ロータリーの中央に立つ女神像を見て博士が言った。

「来年の今頃は【ルーゼニア教創設千年の記念祭】で首都ルヴェリエは更に賑やかになるじやろうのう」

「そうですね。俺はルーゼニア教の信者じゃないけど、千年祭は楽しみにしてますよ」

「お前は どうしてルーゼニア教に入らないんじや？ アダムズ王国
唯一無二の教えじゃぞ。国を支える軍人なら尚更入ったほうがよ
ろくに」

「博士に言われたくないですよ。育ての親の博士自身が入ってない
のに、どうして俺が入るんですか。それに何だか神様に縋るって
いうのが、どうも生に合わないって言うか。最終的には自分自身の力
で乗り越えるしかないんじゃないかって思うし、そうするとなか
か信じる気にもならないですよ」

「ほう、大した考えじゃな。じゃがわしはなジュール、あの女神ヒ
ュパティアのなんとも言えない切ない表情を見ると、その教えはど
うあれ、ルーゼニア教に入っても良いかと思えてしまえてのう」

「でもそれはあの女神像の顔がそう見えるだけでしょ。それだけで
入会するっていうのは馬鹿げてますよ」

「お前はルーゼニア教を発祥させた女神ヒュパティアが、人間に対
しなせその教えを広めたか知っているのか」

「教えを広めた理由は知りませんが、愛・勤・節の【心の三区
分】くらいは知ってますよ。確かにこの教えは良いことだと思いますが、
これだけ科学が発達した世界で、いつまでも神様を崇めるのはどう
したもんかと」

「科学者のわしがルーゼニア教を肯定し、軍人のお前が否定するの
もおかしなものじゃな。じゃがなジュール、これだけ科学が進歩し
ても、まだまだ解き明かすことのできない事が、世に数多くあるの
も事実じゃて」

話の途中ではあったが、順番が来たためタクシーに乗り込んだ。
博士が行き先を説明している間、ジュールはタクシーの中から、
女神像の顔を眺めた。

ルーゼニア教を創設したとされる女神ヒュパティアは、アダムズ
王国に伝わる神話にて【天地開闢の三柱】と呼ばれ、世界を造った
三神の内の一人であり、その中でも人間を含む、全ての動植物を生
み出した【生産の神】として崇められていた。そんな女神像の眼差

しは確かに切なく、またどこことなく哀しく感じられた。

そして何故だかその感覚が、ヘルツから聞いたラヴオアジエと呼ばれるヤツが、自分に対して向けた眼差しと重なって思えた。

（確かにヤツの正体もよくわかっていないし、世の中は科学で解明できていない事のほうが、まだまだ多いのかもしれないな。ヘルツの外したことの無い勘だって何の根拠こんきょも無いし、それに俺の体も……）

ジュールは女神像を見つめながら、月夜の戦いで短刀が刺さった肩を強く握った。

「そう言えばジュール、お前もつすぐ結婚式じゃな。いつの間にかお前も大人になったのう」

「あつ、そうですね。ぜひ博士にも参加してほしいですけど、お尋ね者の博士を呼ぶわけにはどうも……」

グラム博士から突然振られたの結婚の話に、ジュールは少し困惑こんわくした。

「気にするな。お前たちが幸せなら、わしはそれだけでええ。幼き頃よりお前達二人を見てきたわしじゃ。今更何も心配しておらんし、式など出ても退屈なだけじゃ。結婚式など、神よりも非科学的じゃしな」

「ハハッ、愛情は古来より科学で解き明かせない、一番の謎ですね」
他愛のない話をする二人を乗せたタクシーは、徐々に降り方を強める雪の中を、目的地に向けて走った。

しばらくするとタクシーは、首都ルヴェリエの中でも最も疲弊ひへいしているスラム街に到着した。

高度な文化を構築するアダムズ王国は、大多数の国民が高い水準いしなの生活を営んでいる。しかし、その流れから取り残された一部の民達たみは、こうしたスラムで貧しさを共有し、お互いの傷を舐め合うように生活をしていた。

街の安全を守るはずの警察部隊の目が届きづらいこともあり、非

常に治安が悪く、また街全体が不衛生であり、様々な病が蔓延する
など、一般の市民からは遠く距離を置かれていた。

だがそれが逆に、犯罪者や訳有りな者が身を隠すには最適な場所
でもあった。

今にも崩れそうなビルが密集する場所で、グラム博士はタクシー
を止めるよう指示した。

タクシーを降りた二人は、そのビルの中の一つに入った。

薄暗く湿った空気の充満するビルの中は、何かが腐ったような異
臭が漂い、とても人が住む場所とは考えられなかった。ただ、博士
の後について歩くジュールの足取りはとても軽やかだった。

なぜなら荒みきったこの街は、ジュールがまだ幼き頃、グラム博
士と共に過ごした場所でもあった。

「この胸クソ悪い感じ、懐かしいな。十年ぶりだけど、この街はホ
ントに何も変わってない。でも博士、いつこの街に戻ったんです？」
「半年ほど前じゃな。ちとフアラデーに用事があったのう。じゃが
あいつは死んでしまっただけ……」

グラム博士は言葉に詰まり、少し無言になった。

階段で四階まで上がり、か弱い蛍光灯の明かりが照らす廊下を少
し歩くと、全面錆だらけのドアの前で止まった。

博士はそのドアのカギを開けると、ジュールに言った。

「さあ、入れ」

錆だらけのドアは見た目からの予想に反し、軽い力で開いた。

部屋に入るとそこは、狭いながらも小さな研究室になっていた。

「大した設備は整ってないんじゃが、今はここがわしにとっての城
じゃな」

ジュールはふと壁に貼ってある写真を見た。

少し古い写真だったが、そこにはグラム博士とフアラデー、そし
てジュールの知らない二人の男性が写っていた。

二人の内の一人は浅黒い肌をした健康的な顔立ちであり、もう一
人は対照的に青白く痩せこけた顔をしていた。

そしてジュールは後者の男性をどこかで見たような気がしたが思
い出せなかった。

「ほれ、ジュール」

グラム博士は呼びかけたジュールに向け、親指の先ほどの大きさ
をした小さな赤い玉を投げ渡した。

「何です、これ？ また訳の分からないもの作ったんですか」

「何を言うちよる、お前十分世話になつとるじゃる。そりや見たま
まの爆弾じゃよ。大きさは今までの十分の一じゃが、威力は倍じゃ。
飛躍的に軽量化とコンパクト化を成し遂げたのと同時に、性能まで
上げたのじゃ」

「凄い、これ凄いですよ博士！」

「説明はまだ途中じゃて。こんなことで驚いてたら最後までもたん
ぞ」

ニコニコしながら博士は続けた。

「赤・青・黄・緑・橙・灰の全ての玉で同様の変化をとげちよる。
まあお前の言うちよった科学の進歩とゆうやつじゃ。さらにそれだ
けじゃない、おまけも付けとる」

「何ですか」

「今までの玉は直接その玉を銃で撃つなどして、衝撃を加えて初め
て発動したものじゃ。これは戦闘状況においては使用者や部隊にリ
スクが有り過ぎる。そこでじゃ」

博士は黄色の玉を取出し、一瞬その玉を壁に擦りつけた。

「3 , 2 , 1 ……」

そう言うってから博士は黄玉を放り投げた。投げられた玉は空中で
凄まじい閃光を放った。

「急に何するんですか、眩しいですよ！」

まさかと思いき前に目を閉じたジュールであつたが、それでも強
い光を感じ、たまらず叫んだ。

「まあまあ、そう目くじら立てるな。聞くより見るが易しじゃから
のう。見ての通り、時限タイマー機能を追加したのじゃ」

目を丸くするジュールに対し、グラム博士は得意げに言った。

「手に持つ赤玉を見てみるのじゃ。玉に一周細い線が描いてあるじやろ。この線の方向に玉を壁に擦りつけるなどして摩擦熱まこつねつを加えるのじゃ。熱を加えたら3秒後に発動じゃ。もちろん今まで通り、直接衝撃を加えることで発動させることもできるのじやが、対象が小さくなつたから狙うのが大変じやろうて」

グラム博士は机の引き出しを開け、一冊のノートを取り出した。

「このノートに作り方が書いてある。これを【ヘルムホルツ】に渡すのじゃ」

「ヘルムホルツにですか。あいつは軍人でありながら【アダムズ王立協会】の会員ですよ、いいんですか？」

「今やこの国の科学者で、わしが信頼できるのはあやつだけじゃ。あやつはお前と同じでこのスラムの出じやろ」

「確かにヘルムホルツは良いやつだし、ガキの頃に俺とマイヤーと一緒にこの腐った街で育つた仲です。でも王立協会は、自らの発明品が戦争の道具になることを嫌つた博士を追放し、さらに犯罪者扱いまでしている組織ですよ。その一員であるあいつに、こんな重要なものを渡していいんですか」

「お前はわしのことを誤解しちよる。わしはただ逃げ出ただけじやよ。アダムズ王立協会はこの国の科学者団体の頂点であるのと同じ時に、国の行政にも大いに影響をもつておる。協会での立場が上がれば上がるほど、自分の意思とは関係無く、そんな政治活動にまで首を突つ込まなければならんのじゃ。わしは政など真つ平ごめんじや。じゃが辞めようにもわしは協会のことを深く知り過ぎてしまつた。そんなわしを協会が黙つて見送るわけ無いじやろ。わしは怖くなつて逃げ出したのじゃ。それにのう……」

博士は何かを続けて話そうとしたが、きむずか気難しい表情で話題を逸らした。

「これ以上話すとお前の軍人としての立場が悪くなるかも知れん。まあどんな組織にも裏の部分はあるものじゃ。知らなくて良いもの

は、知らぬほうぐええ」

煮え切らない表情をするジュールに、博士は言った。

「そう心配せんでも大丈夫じゃ。仮にこのノートが他人の手に渡ったとしても、大したことではない。所詮^{しよせん}わしの作ったこれらの玉は時代遅れの産物じゃ。現在この世界で最高の頭脳を持つ科学者【ラジアン博士】が次々に開発している電子兵器の前では、だれも見向きせんじゃろ」

「でも博士の作った武器があつたからこそ、俺たちはヤツを倒すことができたんですよ」

「じゃがその戦いでフラデーは死んだのじゃろ。あいつもまた、このスラムの者じゃ。残念じゃよ……」

グラム博士は壁に貼つてある写真を哀しげに見つめた。写真に写っている四人の顔は、とても楽しそうだった。

フラデーはジュールよりも一回り年上だったが、同じスラム出身ということ、軍では特にかわいがられた。

厳^{きび}しさの中にも愛情があり、フラデーは多くの部下から慕^{した}われていた。戦闘技術も非常に高かった彼は、コルベットやトランザムから幾度^{いくど}となく配属を打診^{だしん}されていたが、なぜかそれを受け入れようとしなかった。

常に戦場で若い隊士の先頭に立ち、的確に任務を遂行^{すいこう}する彼のことをジュールは尊敬^{そんけい}し、兄の様に慕^{した}っていた。

そんな彼がああ夜、無残に首を切り落とされ絶命^{くつめい}したことを、ジュールはまだ少し信じられずにいた。

ジュールは徐^{おもむき}に博士に尋ねた。

「博士、【ヤツ】とは一体何者なんですか。博士なら何か知ってるんじゃないですか？」

ジュールからじつと見つめられた博士は、少し困惑^{こんわく}した表情を浮かべ黙っていたが、その訴えかける視線の力に屈^{くつ}つしたのか、ゆっくりと話し始めた。

「お前も知つとるようにヤツとは人外の者の総称じゃ。わしら人間はその想像を超え、かつ危害の対象となるものについて、忌み嫌う性質を持つておる。特にヤツの化け物じみた容姿が人々にとって、恐怖の対象としか写らず、何のためにヤツが存在するのか考えもせんで、その存在自体を軽蔑視するために【ヤツ】と呼んだ」

「でもヤツは、多くの人の命を残酷に奪っている」

「ヤツが初めてこの国で目撃されたのは、二十年以上前のことじゃ。現在までに十体ほどのヤツが確認されとるが、人の命まで奪ったのは一番初めに出現したヤツと、お前たちが倒したヤツの二体だけじゃ」

「……」

「それ以外のヤツは、まったく言っていはいほど人に対して何の危害も加えていない。いやむしろ人を助けた記録も残っておるくらいじゃ。全てのヤツが消息を絶っている今となつては、本当か否か定かではないがのう」

「確かに今回現れたヤツも、初めは人に対して危害を加えることはなかった。ただ今までと異なる点は、同時期に分かっているだけでも三体のヤツが現れています。一度に複数のヤツが現れたことは過去においても一度もありません。三体のヤツがそれぞれにを目的としているのかは不明ですが、二番目に現れたヤツが初めに人を傷付けた。それを機に他のヤツも人に対し危害を加えるようになった。そして我々にヤツの抹殺命令が下つたのです」

「二番目に現れたヤツが危害を加えたのは、協会の科学者じやつたと聞くが本当か？」

「ええ、本当です。ただあまり上層部の方ではなかったらしく、名前までは覚えていません」

「所説によれば、ヤツの知能は成人の人間と変わらないということじゃ。闇雲に人を襲うとは考え辛いのじゃが」

「我々軍人は上の指示に従うだけで、ヤツの気持ちまでは考えません」

その言葉とは裏腹に、ジュールはヤツの最後に口にしたあの言葉の意味を考えていた。

今回三体のヤツが同時期に出現したわけだが、初めの一体以外は出現後早々に姿を消した。だがその一体だけは首都ルヴェリエの中に残り人を襲っていた。

「ヤツについてはまだまだ謎が多い。それはヤツとの接触が極めて少ないことも要因の一つじゃ。じゃがお前達はヤツを倒した。これは過去においても初めてのことじゃ。その死骸を調べれば何か解るかも知れんがのう」

「でもヤツは死んだ後、人の……」

ジュールは言葉を飲み込んだ。

首を落とされ、息絶えたヤツの姿が人のものへと変化したことが、ジュール自身今だ半信半疑だったため、その事を博士に伝えることに躊躇した。

「まあ良い。いずれ事の真相は誰かが解き明かしてくれるじやろうて。ただ一つ言えることは、人は身勝手な生き物じゃということじや。人知を超える存在が目の前に現れたとして、それが女神ヒュパティアのような美しい姿をしておれば、神と崇めるじやろ。逆にヤツの様な醜い姿をしておれば、その容姿から悪魔の化身であるかのごとく、理由も無しに排除の対象にしてしまい、事の真相を見極めようとしなない。寂しいものじゃ」

ジュールは博士の言った言葉にうなずいた。ヤツの行動には何か理由があつたはずだ。あの夜のヤツの眼差しからは、訴えかける何かが伝わってきたし、その理由が知りたかった。そしてその理由を知れば、最後に口にしたヤツの言葉の意味が分かる気がした。

そんなジュールはふと、ヤツのこと優しく想い語るグラム博士を不思議に感じた。

「でも博士。どうして博士はヤツのことを、そんな風に想うのですか」

博士は何かを思い出すように言った。

「……そうじゃな。わしは自分が小さい頃に読んだアダムズ王国の神話が好きでな。これはルーゼニア教の教えにも語られている事なのじゃが、わしの心の深層にこの話が根付いているからかも知れん」

神話やルーゼニア教において、天地開闢の三柱とは至高の神と呼ばれる【絶対神ソクラテス】と、その弟で征服や統治の神と呼ばれる【想起神プレイトン】そして生産の神の【女神ヒュパティア】の三人を示唆する。

絶対神ソクラテスと女神ヒュパティアは夫婦であり、天界で暮らしていた。

その時大地はまだ現在ののような型を留めていなかったが、想起神プレイトンはその大地に暮らしていた。

ある日プレイトンはこの大地を今後どうしていくか相談するため、ソクラテスとヒュパティアを呼び寄せた。

ところがプレイトンは、大地に降り立ったソクラテスの首を絞めて殺してしまう。プレイトンは兄の妻であるヒュパティアに対し、密かに思いを募らせていた。そして兄を殺し、自分の妻となるようヒュパティアに言った。

しかしヒュパティアはプレイトンのそんな想いに応じるはずもなく、ソクラテスの亡骸を胸に泣いた。

七日間泣き続け、流れ出たヒュパティアの涙は大地を覆い、やがてそれは海になった。

ヒュパティアの涙は枯れ果てたが、最後に左目から三粒、右目から五粒の七色に輝く涙が零れ落ちた。

その涙がソクラテスの亡骸の上に落ちると、涙から新しい神々が生まれた。

左目から流れ落ちた涙はそれぞれ、銀の鷲、黒い獅子、紫の竜の姿をした神となり【燦貴神】と呼ばれた。

右目から流れ落ちた涙は、狼の頭を持つ修羅、鴉の羽を持つ夜叉、白面金毛九尾の狐、一角尾蛇の虎、そして星の弓を持つ熊の姿をし

た神となり【護貴神】と呼ばれた。

燦貴神は攻撃神となり、プレイトンと激しい戦いになった。
護貴神は守護神として女神を守った。

プレイトンは想いが届かないことに嘆いたが、燦貴神に対抗するため、三人の巨人の姿の神を生み出した。

百年にも及び戦いは続いたが、決着は着かなかった。

このままでは、いつまでたっても戦いが終わらないことを感じたヒュパティアは、ついに自らプレイトンに立ち向かう決意をした。

そんな女神は別れを告げるように、亡骸であるソクラテスの鼻に優しく口づけをした。

すると突然ソクラテスの体が眩いまでの光を放ち、巨大な剣へと姿を変えた。

その剣は大神剣【素盞王】と呼ばれ、ヒュパティアはその大神剣でプレイトンを倒した。

しかしプレイトンが死んだことで、三人の巨人が暴走を始めた。

燦貴神は巨神の暴走を食い止めるため、必死の攻撃を加えた。

やがて燦貴神は力の弱った巨神を食い殺し、百年ぶりに、大地に平静を取り戻すことができた。

だが今度は巨神を食べた燦貴神が暴走を始める。燦貴神は食い殺したはずの巨神に、心と体を支配されていたのだ。

ヒュパティアは護貴神にその身を守らせつつ、天に向け祈りを捧げた。

すると天高く輝く太陽より、三本の【光の矢】が放たれ、暴走する燦貴神を打ち抜いた。

光の矢に体を打ち抜かれた燦貴神は【鏡】の形にその姿を変え、神の力は封印された。

ヒュパティアは身を守らせた護貴神についても、いつ暴走するか分からないと、天に向け祈りを捧げた。

すると今度は夜空に輝く月より、五本の光の矢が降り注ぎ、護貴神の体を打ち抜いた。

護貴神もまた、その姿を【勾玉^{まがたま}】の形に変え、神の力は封印された。

その後燦貴神の封印された鏡は【天照の鏡^{あまてらす}】と呼ばれ、護貴神の封印された勾玉は【月読の勾玉^{つくよみ}】と呼ばれた。

ヒュパティアは大地にある最も高い山の頂に神殿を建て、そこに天照の鏡と月読の勾玉、それに大神剣素盞王^{すさのおう}を祀^{まつ}った。

やがてヒュパティアの流した涙からできた海より、人間を含む様々な生命が誕生する。

ヒュパティアは人間に対し、自ら体験した苦しみ、悲しみ、憎しみの感情を抑制^{よくせい}するために、愛・勤・節の【心の三区分】の教えを唱^{とな}えた。

『人の心には愛情・勤勉・節制があり、その調和を図ることで苦しみ、悲しみ、憎しみの感情を抑えることができる。自分や他人に対し愛情を育^{はぐ}み、自分に課せられた仕事に一生懸命取り組み、決して他人を侵害^{しんがい}してはなりません。そうして皆が調和を図れば、世界の平和は永遠のものとなるでしょう』

この教えの流れを組むのがルーゼニア教であり、この国の礎^{いしずえ}となっていた。

「神話にもあるように、女神ヒュパティアの流した涙から生まれた神々は、人よりも獣^{けもの}の姿に近いのじゃ。それ故^{ゆえ}わしはヤツのことを考えると、人外の悪魔というよりも、本当は人間よりも【神聖な血筋の持ち主】なんじゃないかと思えてしまうのじゃよ」

「最後に神々の力を封印した鏡と勾玉、それと大神剣はどうなったんですか」

「神殿に雷が落ち飛び散ったとか、盗賊によって持ち出されたなど所説あるんじゃが、世界の各地にバラバラになったことは共通しておる。じゃがこれもお伽噺^{おはなし}の範囲であって、実物を見たものはおらん」

「そうですか……」

「どうした、何か気になることでもあったのか？」

ジュールは神々の力が封印されたとされる、神器のことが気になっていた。特に月読の勾玉のことが。

ヤツが口にした【ツクヨミノ胤裔】^{いんえい}という言葉と、神話に出てくる【月読の勾玉】という神器。そして博士の言った【神聖な血筋の持ち主】という言葉。ジュールはそれらが繋が^{つな}がっているような気がしてならなかった。

「グラム博士、【ツクヨミノカナデ】ってご存知ですか？」

無意識にジュールはヤツが最後に口にした言葉を博士に訪ねた。

博士は少し驚きの表情を見せつつジュールに言った。

「ほう、お前も少しは神話を知っているようじゃのう。それらの神器には続きがあつてな。【ツクヨミノカナデ】とは【月読の奏】のことで、月読の勾玉に封印した神の力を解き放つものじゃとされておる。言い伝えでは勾玉と同じ大きさの胎児^{たいじ}を宿す妊婦が、満月の光を浴び光輝く月読の勾玉を見ると、その胎児に神の力が宿ると言われておる。月読の奏がどういったものなのかは不明じゃが、神の力が宿った者がそれを【感じる】と、その者は封印されし、神の力を自由に使うことができるということじゃ」

「【感じる】ってというのはどうゆうことですか？」

「それは分らん。神話にもルーゼニアの教えにも【感じる】という表現しか伝えられていないからのう」

「結局は伝説の中の話というわけか……」

少しは何か手がかりが得られるかと期待したジュールであったが、曖昧^{あいまい}さの残る後味^{あとあじ}の悪さを感じた。

それでも彼は神話の中に、自分が無意識の内に追い求めている【何か】があるのではないかと思えた。

「ずいぶんと辛気臭い^{せきくさい}話になってしまったのう。話を戻そう。わしがお前をこの研究室に呼んだのは、新しい玉の作り方を記したノートをヘルムホルツに手渡すよう頼むこと。そしてもう一つ」

グラム博士は厳重なセキュリティ^{ほつてい}が施された、金庫のような鋼鉄

の箱のカギを開け、その中から見たことの無い色をした玉を取り出した。

「わしが現在開発しておる四つの玉じゃ。二つはすでに完成しておる。一つは発動させるのに条件付きじゃがほぼ完成じゃ。残り一つはあと少しといったところかのう」

グラム博士は、取り出した四種類の玉をジュールに手渡した。

手渡された玉は、白い玉が七つ、桃色と銀色の玉がそれぞれ五つ、そして金色の玉が一つであった。

「それらの玉はお前が持つておれ、ジュール。そして時が来るまで大切に閉まっておくのじゃ」

そう言うなり博士は玉を保管するためのカバンを、半ば無理やりジュールに押し付けた。

「そんな大切な玉なら、ご自分で持つていればいいじゃないですか。何か責任を押し付けられてるみたいで嫌ですよ、俺」

「わしは時機にルヴェリエを離れる。この研究室も処分し、わしの痕跡こんせきも無く消すつもりじゃ。じゃがせつかく作ったその玉を捨てるわけにもいかんし、わしが持つていても、いつ協会の者や警察部隊に連行されるかわからんからのう。最近まは協会の目を撒くのがしんどくてな。なるべく身軽でいたいんじゃよ」

「ですが博士……」

ジュールは少し嫌な予感がした。何故だかもう、博士とは二度と会えない様に思えた。

「ジュールよ」

博士は困惑するジュールの気持ちを察したのか、優しく語りだした。

「わしら科学者は万物において、何かと理屈りくつをつけたがり、また根拠きよを求めるものじゃ。では何故そうするのか。それは安定を図るためなのじゃよ。現実世界における全ての物理現象は、何かしらの理論や法則の元に成り立っておる。その理論ないし法則を導き出すことが、言い方を変えると安定を図ることになるのじゃ。そして安定

を図ると安心する。この安心感を達成感と感じる者も多いが、それは同一であって、むしろ科学者はその安心感がたまらんのじゃよ。一度その感覚を味わうと、また別の安心感を求め、まだ安定していない不安定要素を探す。そうして次々と新しい理論を導き出し、それが科学の進歩として今に至^{いた}つておるのじゃ。じゃがこれは決して科学者だけに言えることではなく、一般の者たちにも言えることじや。この世の中にはまだまだ原因不明な事や、想像を絶する現象が多々あり、そういった意味不明な、言わゆる不安定要素に人々は不安や恐怖を感じておる。常に不安や恐怖と隣り合わせの環境の中で生きて行くために、人々は無意識に安定を図^{まづ}つておる。その一例が宗教じや。人々は原因不明な不安定要素を無理やり安定させるため、逆に【神】という不確定要素を祀^{まつ}り上げバランスを図^{まづ}つておる。それが心の安定に繋^{つな}がり、そこから感じる安心感が、信仰^{しんこう}という形になつておる」

「……」

「わしも若い頃は、その安心感という麻薬に取りつかれてのう。誰も解き明かせなんだ難問^{われさき}があれば、我先にその問いにのめり込み、その解を導き出しては安心感と達成感を味わつておつた。そして難しい問題を解明すればするほど、周囲からも称賛^{さへい}され、心地よい気持ちになつた。歳が変わらん【世界最高の天才】と謳^{うた}われるラジアン博士に負けんと、周りが見えぬほど夢中になつて研究に没頭^{ぼつとう}した。そしていつしか周囲はわしのことを【世界最高の鬼才^{きさい}】と呼んでおつた。有頂天^{うちようてん}じゃつたよ。グラム博士ならどんな物もすぐに現実の物にしてしまうと煽^{おた}てられ、様々な開発を行つた。わしの作つた物は世の為になると疑わず、望まれた物を次々に形にした。じゃが気付けば、わしの生み出した発明品は、その用途^{ようしよ}を応用され、殺人兵器として軍の武器に姿を変えていた。

わしの発明した物が、多くの人の命を奪つていく。いつしかそう思うようになり、わしは何も考えられなくなつてしまった。人というのは冷たい生き物でな、そうなると周囲の人間はわしにまったく

目を向けなくなりおった。わしは自分の存在価値を見失い、また人間不信にも陥り、自暴自棄になった。人の心はどう足掻いても、解き明かすことはできず、意味の分からない不安と焦りで、完全に自分を見失っておった。そして死を決意した」

「博士……」

「じゃがわしは小心者でな。自殺するのが怖く、誰かに殺めてほし
と思い、気が付くとこのスラムに来ておった。今日のように雪の降
っておる寒い日でのう。長い時間スラム中を歩いたのじゃが、寒さ
のせいか人っ子一人おらんでのう。歩くのにも疲れ、どこかで休み
そのまま凍死するのも良いかと思っておったが、どこからともなく
赤子の泣く声が聞こえてのう。気が付けば、その泣き声のするほう
に足が動いておった。小汚いドブ川に掛かる橋の下にその赤子は捨
てられておつてのう。寒空の下、死ぬこと以外未来のないこの赤子
が不憫に思え、一思いに樂にしようと、わしは懷から持ち合わせて
おった短刀を取り出した。今思えば、なんてことをするんだと冷静
に考えられるが、その時のわしは完全にどうかしておつてな。じゃ
が赤子に向け短刀を振り上げると、何とその赤子は微笑みよつてな
まさか自分を殺そうとしている相手に対し、その赤子は感謝してい
る様にわしには思えた。わしはそんな赤子に、短刀を突き付けるこ
とができなかった。孤独感に苛まれ無力な自分が嫌になり、自分勝
手に命を絶とうとしたわしに、わしよりも遥かに孤独で無力なその
赤子の微笑みは、なぜか安心感を抱かせてくれた。そしてその安心
感は、今までわしが感じたどの安心感よりも心地よく、温かいもの
じゃった。そうになると、今まで死のうとしていたことが急にバカバ
カしく思えてのう。思い直し、わしは生きることにした。そして
この先生きる糧としてこの赤子を、わしの子として育てようと決め
た。そう、その赤子が【ジュール】お前じゃ」

グラム博士は今まで黙っていた、ジュールを育てた理由を初めて
語った。

ジュールは博士のことを良き父であり、また偉大な科学者だと思

っていた。そして博士は誰よりも強い人だと思っていた。そんな博士が意外な弱さをさらけ出し、かつ大きな挫折^{させつ}をしていたことを知り、少し驚いた。

「もちろん独身だったわしは、子育てなど経験が無い。何をするにも苦勞が絶えなかった。科学者のわしは、お前が泣き止まないと、なぜ泣くのかどうしてもその原因を探ってしまった。じゃが赤子に理屈はないのじゃ。時間はかかってしもうたが、共に泣き、共に笑う。そうしてただ親の愛情を注ぎ続ければよいのじゃと、わしは気付いた。温かく見守りながら、子供の成長を身近に感じる。そんな感覚が、科学の追及^{ついぎゅう}しかして来なかったわしを、ずいぶん人間らしく変えてくれた。全てを科学の力で解き明かすことができると、疑わなかったわしの考えが、いかにちっぽけなものだということを、お前は教えてくれたのじゃ。全てを型に収めることは、とても安定しているように思えるが、実は無理やり全てを型に収めるほうが歪^{ゆが}んでいることであり、実際そんなことは不可能なのじゃ。大切なことは、全てをありのまま受け入れることなのじゃよ」

優しく語る博士の言葉の一つ一つから、ジュールは自分に対する博士の愛情の深さを感じ取った。

そしてジュール自身も、博士に対する敬意と感謝の気持ちを正直に伝えた。

「グラム博士が俺の本当の父親でないことは、ずいぶん前から知っています。それでも俺にとって、あなたはこの世で最も尊敬する人間であり、唯一の【家族】です。俺をここまで育ててくれて、本当に感謝してます」

「嬉しいことを言うてくれるのう。ただ一つだけ、お前に母親の愛情を教えてあげることができず、すまんと思うとる。どうもわしは奥手でな。おなごが苦手なのう」

「俺には博士のような【父親】がいてくれただけで、それだけで十分過ぎます。気にしないでください」

「歳を取ると涙もろくなっていかな。次は涙を堪^{こた}える薬でも発明し

ようかのう」

ヘルツに続き、全てを話してくれたグラム博士に、ジュールは心から感謝した。

そして自分が思っている以上に、周囲の人から大切にされていることを改めて感じ取った。

「ところでジュール。ファラデーはお前に何か言うちよったか？」

何か思い出したのか、グラム博士は写真の中のファラデーの顔を見て、ジュールに問うた。

「隊長が俺にですか？ 個人的には特に何も言われてませんが……」
ジュールはふと、あの日ファラデーが小隊に出した指示について思い出した。

「そう言えば、あの日のファラデー隊長の読みは冴さえていました。ヤツがルヴェリエの中心街に突然現れ、俺たちにその追撃命令ついげきが出たとき、他の小隊はいつも通り電子兵器を主体に装備を整えていましたが、俺たちの隊だけは隊長の指示で、刀や火薬の銃、それに博士の開発した玉型兵器を装備して現場に向かいました。さらに隊長の指示の下、俺たちの隊は密集隊形みっしゅうたいけいで作戦にあたりました。ヤツとの戦闘が始まると、どういっわけか電子兵器が機能せず、またインカムなどの無線も使用できなくなり、それらを主体としていた俺たち以外の小隊は、次々とヤツにやられていきました。逆に俺たちは密集隊形であつたことで、ヤツからの攻撃をそれぞれが援護えんごすることができ、また装備していた武器も問題なく使えたことで、最終的にヤツを倒すことができた。どうしてあの日に限って、ファラデー隊長がそうした指示を出したのかは分かりませんが、そのおかげで俺たちは今、こうして生きられているのかもしれない」

「本当に、お前個人に何か言ったりはしなかったのじゃな」

先程までの穏おだやかな表情とは違い、鋭すどどい口調で尋ねる博士に、ジュールは少し圧倒された。

「……ヤツが隊長の体をその太い腕で貫ついでいた時、俺に何か言ったよ

うな気もしますが、あの時は気が動転していてよく覚えていないんです。その後すぐ隊長は首を撥ねられて……。何か気になることでも？」

「いや、何もないなら良いのじゃて」

ジュールは博士から何か、自分に隠している事があるのではと感じたが、彼はあえてそれを聞かなかった。

「そろそろ帰ります。ルヴェリ工を発つ前に、もう一度会えますよね」

「そうじゃな。ここを離れると、しばらく会えんからのう。その前に都合をつけて、連絡するから待っておれ。それにしても駅で偶然にも今日、お前に会えたことを嬉しく思うぞ。この奇跡とも言つべき偶然もまた、科学の理の外側じゃな」

「俺も思いがけなく博士に会えたことを嬉しく思います。ノートの内容は確実に届けますので心配いらないです。それじゃ、連絡お待ちしています。寒いですから、体調に気を付けて下さいよ。もう歳なんだから」

「お前も元気でな、ジュール。【アメリカ】にもよろしく伝えてくれよ」

ビルを出ると、そこは一面の雪景色へと変わっていた。

何となくジュールは後ろめたさを感じ、博士の研究室があるビルの四階辺りを振り返って見た。

「考え過ぎか……」

ジュールは振り返り、まだ誰も歩いていない雪の積もった道に、足跡を残しながら家路についた。

ジュールから博士のいるビルが見えなくなった頃、そのビルを取り囲む複数の黒い影が現れた。

黒い影は、全員揃いの黒い制服を身に着けていた。そしてその中には、テスラの姿も含まれていた。

第四話 余寒の王国

満開の梅の花が人々に春の到来を感じさせていたが、この日は冷たい雨が朝からしとしとと降っていた。

ジュールは、アダムズ城内にあるトランザムの待機所で、他の隊士と共にトレーニングを行っていた。

アダムズ軍総指令直轄戦闘部隊トランザムは、ジュールを含む総勢十名の小所帯ではあったが、コルベットと同じく、全員が軍全体より選抜された、選りすぐりの精鋭集団であった。

ただコルベットが貴族や上流階級出身の隊士によって組織されているのに対し、トランザムはその身分は問わず、ただ腕のみが選抜の対象であった。

それゆえに気性が荒く、人間性や協調性に問題のある隊士が多かったため、軍の中でも浮いた存在になっていた。

それでも、その凄まじいまでの【強さ】がその他全てを補い、存在意義を確固たるものにしていた。

「どうした新入り、女の事でも考えてるのかっ」

「べつ、まだまだです。もう一手お願いします！」

口の中に溢れた血を吐き捨てながら、ジュールは木刀を持ち直し、先輩隊士に向かった。

末席のジュールは、何かと先輩隊士より嫌がらせの様な訓練を受けていたが、持ち前のタフさと負けん気の強さで、それらの訓練を耐え抜き、日増しにたくましさ強めて行った。

そして強引に底上げされる強さを、彼自身も感じ取っていた。いや、強くならねば自分の居場所が無くなることを彼は自覚しており、夢中で剣を振った。

そんな日々成長を遂げるジュールを、いつしか他の隊士たちも一目置くようになっていた。

何度叩きのめされても弱音一つ吐かずに立ち向かうジュールの姿

を、少し離れた所から見つめる二人がいた。

一人は軍のトップであり、テスラの父である【アイザック総司令】。そしてもう一人が烏合うごうの衆であるランザムをまとめ上げる隊長であり、アダムズ軍最強の男と呼ばれる【英雄ドルトン】であった。そんなドルトンの名は諸国に響き渡り、その鬼神のごとき強さは生きながらに伝説になっっているほどであった。

「ジュールのヤツ、少し見ない間にまた腕を上げたようだな。なあドルトン」

「いや、まだまだです。ジュールを見て半年経ちますが、未だあいつの伸び代のびしろが見えません。故ゆえにあいつにはもっと上を目指してもらわねば困りますし、このまま精進しんじんし経験を積みめば、あいつはいつか俺を超える存在になれるでしょう」

「ほう、英雄ドルトンにそこまで言わせるか。まあ訓練所時代からあやつに気を留とめていた、私の目に狂くるいはなかったとも言えるがなハハッ」

意気揚々と笑いながら、アイザック総司令はその場を後にした。

「ガキン！」

ジュールは試合ついていた先輩隊士の木刀を跳ね上げ、その喉元のどもとに切っ先を向けた。

「まっ、参ったぜジュール。今日はこの辺で終しまいにしようや……」

「ハアハア、ありがとうございました。ハア………」

ジュールは、着実に強くなっている自分に高揚感こうようかんを感じた。荒く苦しい呼吸でさえ、なぜか心地よく感じた。

それを見ていたドルトンは、自らの予想以上のスピード成長するジュールに目を細めながら、頼たのもしさを覚えた。

「ジュール、顔を洗ったら俺のところ来い。科学部隊のところに行く」

「ハッ、ハイ。すぐに行きます」

ジュールは配属以来ほとんど口を訊きいたことの無いドルトンに、緊張しながらも名前を呼ばれた嬉しさに気持ちが高ぶった。

王国の英雄であるドルトンはジュールにとって雲の上の存在であり、そんな彼に声をかけられた事は、ジュールにとってこの上ない至福であつた。

科学部隊に向かう途中、緊張しながら付き従うジュールに対し、ドルトンは優しく語りかけた。

「お前とこうして話すのは初めてだな。お前を監督する立場として、もっと早く話したかったが忙しくてな。なかなか時間がとれず、済まなかったな」

「そつ、そんな。とんでもありません。俺なんかに氣を使わないで下さい」

「ハハハッ。そう緊張するな。隊長が部下と話するのは当然のことだ。お前のことは以前よりフラデーから聞いていてな。不器用だが、根性の座った生きの良い若いのがいると、前々から推薦されていたのさ」

「フラデー隊長から……ですか」

「俺とあいつは、同じスラム街出身でな。子供の頃は、二人でよく無茶をしたものさ。俺のほうが少し歳上だが、あいつはいつも俺に負けんと背伸びばかりしていた」

「ドルトン隊長も、あの街で育ったのですか」

「お前も同郷らしいな。不思議なことにお前を見ると、懐かしい感じがするよ。」

「……胸クソ悪い感じですか」

「ハハッ、別に変な意味じゃない。お前は俺の昔にそっくりなんだ。あの腐った街を抜け出し、何の後ろ盾もなく、その身一つで駆け上がろうと必死にもがく。そんな姿が昔の俺と重なって見えるのだから」

「買い被り過ぎです。俺はとても英雄になれるような器じゃありません」

「英雄になるかどうかは、お前が決めることじゃない。歴史が後に決めることだ。それにお前こそ自分を過少に思い過ぎだ。変に期待

をかけるわけじゃないが、俺とファラデーが気に留めた男だ。もつと自分に自信を持って」

「そんな……」

根拠はどうあれ、尊敬する二人より認められていたことに、ジュールは顔を赤らめながら嬉しさを噛みしめた。

科学部隊は軍で使用する武器や防具、また様々な道具を開発・改良している部隊である。

そのトップには、世界最高の天才と呼ばれるラジアン博士がおり、軍の組織でありながら、王立協会とも深い関係にあった。

科学部隊の中でも、さらに最新鋭の兵器開発を行っている上層部隊を通称「カプリス」と呼び、最高頭脳を結集したカプリスは、次々と強力な武器を世に送り出していった。

当然軍の最強部隊であるトランザムで使用する武具は、全てカプリスで開発されたものであり、科学部隊に到着した二人は、迷うことなくカプリスの研究所に向かった。

「お前は特注していたバトルスーツを取りに行け。俺は別件でラジアン博士のもとに行く。後で俺もそっちに行くからそれまで待つてろ」

ドルトンと別れたジュールは、勝手の分からない研究所をうろついていた。

場所を聞くにも白衣をまとった研究者たちが、それぞれ自分の世界に没頭するよう研究に勤しんでいたため、何となくジュールは声をかけづらかった。本当にここは軍なのかと疑いたくなるほど、異次元の世界に足を踏み入れた感覚だった。

そんなジュールの肩を、ポンポンと誰かが叩いた。

振り向くとそこには、ガウスよりも巨漢で武骨な、一見とても科学者に見えない男が立っていた。

「なにウロウロしてんだ、ジュール。スーツ取りに来たんだろ。こっちだ、ついて来い」

「お、おう。ヘルムホルツか。助かったぜ。それにしても相変わらず愛想の無いやつだな、お前」

ジュールは黙々と進むヘルムホルツの後を追ひ、研究所の隣に併設される、倉庫のような施設の中に入った。

入口に透明な袋に詰められた、トランザムのものと分かる赤色のバトルスーツが一着壁に掛けられていたが、それ以外施設の中はガラシとしていた。

「お前、そこに掛けてあるスーツに着替える。その後は思い切り施設の中を動いてみるんだ。この施設には色々なセンサーが付いていて、お前の動きを分析してスーツが最適な状態になっているのか確認する」

「へえ、凄いもんだな。でも立ち合いはお前一人なのか？」

新しいスーツを手に取りながら、この広い空間に、自分とヘルムホルツの二人しかない事が少し気になった。

「不満か。お前になんぞ、俺一人で十分だろ。それにそのスーツを作ったのは、俺だしな」

「ほう、たいしたもんだな。どれだけの性能か、楽しみだよ」

ジュールは、少しきつめなスーツを着るのに手間取った。

「初めはきついが、すぐにお前の体の形に定着する。このスーツは俺がお前専用についた完全なプロトタイプさ。現在軍で使用されているバトルスーツの中でも、最新最強の性能を誇るスーツに仕上げである。今回お前にこのスーツを渡したのは、新開発のこのスーツの性能を実戦で検証するためだ。そして問題がなければ、その後量産へと移行する」

「なんだよ、それじゃ良い実験台じゃないか」

「当たり前だ。そうでもなければ、こんな最新技術を駆使して作られた大切なスーツを、どうしてお前なんかに渡さねばならん」

「正直に言ってくれるぜ。まあ、お前のそういう何でも馬鹿正直に話すところは、嫌いじゃないがな」

「俺だって鬼じゃない。最初に言っただけ、このスーツは【お前

専用】だと。昔から見てきたお前の特徴を生かすよう計算して作っている。そしてグラム博士の新技术によって小型化された玉型兵器を無理なく装備でき、使いやすさを追求したベルトも同時に作製した。すでに玉型兵器は装備済みだ、確認してみる」

手渡されたベルトは、腰に巻くベルトと肩に掛けるホルスターが結合した構造になっており、小型のケースがいくつも取り付けられていた。そしてそのケースの中に、小型になった多数の玉型兵器が仕込まれていた。

「これは咄嗟の時に使いやすいな。でも装備されてるこれらの玉も、お前が作ったのか？」

「俺は本来防具専門なんだが、今回はすべて俺一人で行った。博士のノートには丁寧過ぎるほど細かく詳細が書いてあったから、思いのほか簡単に作れたよ」

「それにしてもこのスーツ、軽いし動きやすいな。でもこんな薄い物で、防御力は大丈夫なのか？」

「バトルスーツは戦闘時において、制服の下に装備するものだ。それゆえあまりゴツくできん。むしろ薄く軽量化が望まれる。今お前が着ているスーツは、カプリスが最近開発した【KSR-35】という新素材で作られている。

これは超軽量繊維素材に強度物質を組み合わせたもので、一般の隊士が身に着けているスーツに対し、約5倍の防御力を誇っている。小銃程度なら、ほとんどダメージを受けないはずだ。だが特筆すべきは防御力ではなく、身体能力加速機能だ。この機能はアダムの基本理論である【光子相対力学】の作用を用いて、装着した者の身体能力を高める働きを持っている。

ただし反動も大きく、使用者に相應の肉体的負担がかかる。そのためこの機能の付いたスーツは現在、屈強な肉体を持つ精鋭集団である、コルベットとランザムにのみ配備されている。それでも現状では使用者の負担を考え、約2・5倍程度の能力アップに機能を抑制している」

「それで、このスーツはどうなんだ？」

「KSR-35はその軽さと丈夫さに加え、優れた緩衝機能^{かんしょう}が備わっている。そのため装備した者への肉体的負担を、著しく低下^{いちじる}させることができるんだ。机上での予測では、少なくとも3・5、いや4倍はいける筈^{はず}だ。ただ実際のところは使ってみなければ分かんない」

「そこで俺が実際に使ってみるというわけか。ところで左の手首についてるこれは何だ？」

ジュールは左手首の部分に付いている、ダイヤルのような突起物^{とっきぶつ}を指さし尋ねた。

「そのダイヤルを回すことで、機能の出力を制御^{せいぎよ}することができる。初めは3倍の設定になっているが、あとはお前が耐えられる範囲で出力を上げてみる。最大で8倍まで上げられるが、タフなお前でも5倍は無理だろう」

一通りの説明をヘルムホルツから聞いたジュールは、施設の中を縦横無尽^{じゅうおうむじゅん}に走ってみた。

左手首のダイヤルを制御し、3・5倍、4倍と出力を上げて行く。それをセンサー越しに観察していたヘルムホルツは、徐にマシンガン^{おもむろ}を取り出しジュールに言った。

「避けてみる、ジュール！」

ジュールに向け、おびただしい数の銃弾が向けられた。

数発の銃弾が彼の体をかすめたが、どうにか全弾を避けることができた。

「これならどうだ！」

今度は小型のビーム砲を構え、ヘルムホルツは容赦なくジュール^{やていしゆ}に向け、その引き金を引いた。

「くそっ」

ジュールは信じられないスピードを発揮^{はつき}し、ビームをかわした。勢い余ったジュールの体は、施設の壁に激突した。

「さすがだな、ジュール！ 良かわせたな！」

めずらしく声を高良^{たから}げるヘルムホルツに、ジュールは怒鳴^{どな}った。

「馬鹿かお前！ まさか本当に俺を殺すつもりか？」

「スマンスマン。だが人間は危機的状況にならないと、真価^{しんか}を発揮しないからな。済まなかったよ」

ジュールは全身の筋肉が千切れたかのような激痛を感じ、少しの間動くことができなかったが、身体能力加速機能の凄まじい性能と、その副作用ともいうべき肉体への反動を身をもって学習した。

ふと左手首を見ると、出力は6倍を示していた。

施設のセンサーより得られたデータを確認しながら、ヘルムホルツは静かな声で休息しているジュールに言った。

「ジュール。今この施設の中は完全に密室であり、盗聴される心配もないから聞くが、お前から渡されたグラム博士のノート、俺以外誰にも見せてないよな」

「当然だろ。博士との約束を、俺が破るとでも思ってるのか！」

「しばらくの間、あのノートに書かれた技術は公表しないつもりだ。あの小型化の原理は凄い。ただその手法に少々問題がある。もし王立協会の人間にこの技術が知れると、非常にまずいことになる……」

「どういうことだ？」

馬鹿正直な性格だけに、ヘルムホルツの表情が物語る深刻^{しんこく}さがジュールに伝わって来た。

「あまり詳しいことを説明しても、お前じゃ理解できんだろう。ただ博士が行っていた研究は、現在のアダムズ王国の科学を真つ向から否定することにもなり兼ねない技術だ。それにこの技術は……」

「ドンドン！」

ヘルムホルツの話を遮^{さへき}るように、施設のドアを叩^{たた}く音がした。

「恐らくドルトン隊長が来たのだろう」

「やはり研究所で話すのはリスクが高いな。ジュール、お前近いうちに時間つくれるか？」

「構^{しんみょう}わないが、そんなに重要なことなのか……」

神妙^{おもしろ}な面持ちで黙^{もく}ってうなずきながら、ヘルムホルツは施設のド

アを開けに向かった。

ドアを開けると、身の丈たけほどある長刀を背にしたドルトンが立っていた。

「どうだジュール。新しいスーツの調子は」

「えっ。ああ、凄いスーツですよ。だた使いこなすには少し時間がかかりそうです、体への負担も大きいし……」

ジュールはヘルムホルツの話の続きが気になったが、とりあえずこの場を凌しのごうと、ドルトンに言った。

「隊長の要件は済んだのですか。こちらも終わりましたので、そろそろ待機所に戻りましょうか」

まだ完全に痛みの引かない体で、急ぎ帰り支度じたくを整えながら、ジュールはヘルムホルツに言った。

「なあヘルムホルツ、今晚飲みに行かないか。久しぶりに会ったんだし、たまには昔話でもしようぜ」

「そうだな。今日のデータも渡さなきゃならんし、仕事が終わったら、トランザムの待機所に行くよ」

ジュールはヘルムホルツが作ったスーツとベルトを持ち、ドルトンと共にカプリスの研究所を後にした。

ただジュールには、この国の科学を否定するほどという、グラム博士が行っていた研究がどういったものなのか、気になって仕方がなかった。

アダムズ軍は大きく二つに分けられる。

一つは街の治安や城の警護などを行う【警察部隊】であり、もう一つはジュールやテスラの所属する、他国との戦争やテロリストとの戦闘を受け持つ【軍事部隊】である。

警察部隊はその性質より、国の様々な場所に拠点きょてんを持ち、市民の平和な暮らしを維持するよう務めていた。

それに対し軍事部隊は、国の中心である首都ルヴェリエ、そして東西南北に位置するそれぞれの主要都市に、その拠点を構えるのみ

である。中でも軍事部隊の双壁そうへきをなすコルベットとトランザムは、王族の暮すアダムズ城内に、その拠点を構えていた。

城に戻ったジュールとドルトンが、トランザムの待機所手前にある、少し広めのホールに差し掛かると、何やら人集りひとだかが出来ていた。「どうしたんだ？」

ドルトンはその場に居合わせたトランザムの隊士に尋ねた。

「どうもこうもないですよ、いつもの身内同士の喧嘩けんかです。勘弁かんぺんしてほしいですよ、まったく……」

人集りの中心には、皇太子殿下である【トーマス王子】と、コルベットの隊長である【トウエイン將軍】の姿があつた。

トーマスは現国王であるアルベルト王の一人息子であり、トウエインは国王の妻であり、トーマスが幼少の頃に病死した、母である王妃の実弟であつた。

トウエインは王族でありながら、戦術に秀でた才能を持ち、その能力の高さと実力で、軍のNo.2である將軍職に上り詰めていた。両者は叔父おじと甥おいの関係であつたが、幾度と無く対立を繰り返していた。

「やあ、ジュール。久しぶりだね」

「お、おう。久しぶりだなテスラ。元気そうだな」

人集りの中にはもちろんコルベットの隊士もあり、そこにいたテスラはジュールの姿を見つけると、人込みをかき分けながら近寄り声を掛けてきた。

「テスラ、お前最初からここにいたのか？ 俺は今来たばかりなんだが、今回は何の騒ぎさわなんだ」

「【リーゼ姫】のことだよ。コルベットとトランザム、どっちが姫の警護をするかで揉めてもいるみたいだよ」

リーゼ姫は、アダムズ王国の東に隣接りんせつする小国【パーシヴァル王国】の王族だ。

アダムズ王国とパーシヴァル王国は、古くから友好な関係を築い

ており、活発な交易（こうえき）を行っていた。

そんなパーシヴァル王国は5年ほど前、軍を統括（とうかつ）する【ボーア將軍】による突然のクーデターによって、王族は皆殺しにされた。

その後ボーア將軍は指揮下の軍勢と共に、王族で唯一生き残ったリーゼ姫を連れ、アダムズとパーシヴァルの国境の山岳地帯（さんがく）にある【プトレマイオス遺跡】に立て籠こもった。

プトレマイオス遺跡は神話にて、女神ヒュパティアが建て、神器を祀まつったとされる神殿であった。

しかし現在は廢墟と化し、神話にて語り継つがれるような雅さ（みやび）は、微塵（みじん）もなかった。

そんな遺跡に立て籠もったボーア將軍は、パーシヴァル王国の要請（せい）により、リーゼ姫の救出に來たアダムズ軍に対して、その攻撃に対する決死の抵抗を行った。

しかし將軍はどうしてこのような一連の事態を引き起こしたのか、その行動理由を明確にすることは一切なく、また姫の身柄（みがら）に対しても何の要求も行わなかった。

その為なぜ姫を連れ去り、こんな辺境（へんきょう）の遺跡に立て籠もるのか、アダムズ軍には理由が分からなかった。

そして理由の分からないこの戦いを、いつしか人々は【ボーアの反乱】と呼んだ。

圧倒的な軍勢力を誇るアダムズ軍の攻撃によって、ボーア將軍の率いる反乱軍は、容易に壊滅すると誰もが予想した。しかし科学者としても名高いボーア將軍は、アダムズ軍の最新兵器をもつとせず、自ら考案した特殊兵器を使用し、逆にアダムズ軍に甚大（じんたい）な損害（そんがい）を与えた。

独自の文化を構築していた小国のパーシヴァル王国は、アダムズ王国と親密な関係を築いてはいたものの、科学分野においても、アダムズに無い独特な技術を持っていた。

そんなパーシヴァル王国が持つ、独自の科学技術の発展をけん引していたのがボーア將軍であり、この反乱で將軍は、今まで自らが

培^{つちか}つてきた全ての知識と技術力を、敵対するアダムズ軍に叩^{たた}きつけた。

見たこともない武器によるゲリラ的な攻撃に、アダムズ軍は苦渋^{くじゆう}を強^しいられた。

当初の予想を裏切り、ボーアの反乱は開始から四年もの歳月^{さいげつ}を費やしていた。

そしてジュールやファラデーも軍の一員として、リーゼ姫奪還^{だつかん}のためにこの場所で、凄まじい戦闘を繰り広げた。

いつ終わるとも分らない泥沼^{どろぬま}の戦いになっていたボーアの反乱は、意外な形でその幕を閉じる。

軍勢力に大きな差がありながらも、互角の戦闘を繰り広げていた反乱軍は、とある満月の夜にボーア將軍を含むほぼ全ての幹部兵士が、突然の自害^{じがい}を血行した。

翌朝、残りの反乱軍兵士はその全員が無条件で降伏^{こうふく}し、人質^{ひとし}だったり、ゼ姫もまた、無事に保護された。

その後降伏した反乱軍兵士の一部は、アダムズ軍の拘置所に送られたが、残りの大部分はボーア將軍並びに幹部兵士に強要されたこととされ、咎^{とが}めを受けることなくパーシヴァルへ戻^{かえ}った。

ただし、再度同じ様な事態が起こらないよう暫定処置^{さんていしよち}として、アダムズ王国がリーゼ姫の身柄^{みがら}を一時保護するとともに、パーシヴァル王国にアダムズ軍を駐留^{ちゅうりゅう}させることとした。

ボーアの反乱が終結して一年が経過したが、その間アダムズとパーシヴァルに目立った出来事はなく、現在まで平穩^{へいあん}が保たれている。ただボーア將軍が何を目的として、このような事態を引き起こしたのか、それだけは今も謎のままであった。

トーマス王子とトウェイン將軍の言い合いは平行線をたどり、一向^{いこう}に収集の目途^{とめ}が立ちそうになかったが、そんな王族同士の喧嘩^{けんか}を放っておくわけにもいかず、周囲の者たちは半ば呆^{あき}れて二人を見ていた。

特にトランザムの隊士たちには迷惑極まりなかった。

荒くれ者の隊士たちではあったが、トランザムを抱えているのは総司令のアイザックであり、王国最強の精鋭部隊として、その任務には誇りとプライドがあった。

だがアイザックと親交を密にする王子は、幾度となくトランザムを私的な事情に使用し、さも自分の私設部隊のごとく、隊士たちを顎で使っていた。

トーマス王子は科学こそ苦手としていたが、非常に頭がよく、特に経済学においては非凡な才能を備えていた。

そのため近隣諸国との交易には積極的に取り組み、アダムズ王国の発展に大きく貢献していた。

ただあまりにも頭の切れが良すぎたため、自分以外の皆全てが愚か者に見え、その言動にはいつも人を見下す様な所があり、人望は極めて希薄であった。

特に見た目が武骨なトランザムの隊士たちには、低能無知を決めつける発言を連呼し、そのくせ無理難題な任務を押し付けては、不適な笑みを浮かべていた。

そんな王子に対し、隊士たちの不満は極限までに達しており、『俺たちは王子の犬か！』と、耐え難い屈辱に怒りを露わにした。アイザックやドルトンは、そんな隊士たちを不憫に思いながらも必死になだめた。

「トーマス王子！ いい加減にして下さい。他国の王族を警護するのは、コルベットの任務であると法で決まっていますのです。これは国王がお決めたことになったことで、いかに王子が反対されても、覆るものではありません！」

トウエイン將軍の発言にコルベットの隊士のみならず、トランザムの隊士までもがうなずいていた。トランザムにしてみれば、余計な仕事を増やされなくなかったし、これ以上王子に振り回されるのは懲り懲りだった。

だがそんなことにはお構いもせず、トーマス王子は言った。

「私とリーゼ姫はいずれ夫婦となる身です。未来の夫が警護して何の問題がありません」

「それは王子が勝手に決めたこと。リーゼ姫が誰と結婚するかなど、そんなことは何ひとつ決まっていはいない！」

怒りが頂点に達しそうなトウエイン将軍とは逆に、なぜかトーマス王子はその顔色一つ変えず、むしろこのやり取りを楽しんでいるかの様であった。

その証拠に王子は軽い笑みさえ浮かべていた。

「ああ言う王子の肝の据わっているところは嫌いじゃないんだが、そろそろ頃合だな」

そう言って、ドルトンは言い合いを続ける二人のもとに向かおうとした。すると、

「みな様、どうかさいましたか？」

透き通る様な声が聞こえ、ホールに集まる人々はハツとなった。

そこには紛れもない、話の当事者となっている【リーゼ姫】の姿があった。

小柄であり、年齢の割に少し幼く見える顔立ちであったが、その容姿はまるで女神が甦ったかの様に美しく、慎ましくも艶やかであり、なにより微笑む彼女の笑顔は、見る者に何とも言えぬ安らぎを与えた。

リーゼ姫は王族でありながら、決して傲りが無く、身分に差別なく手を差し伸べることができる、真に清らかな性格の持ち主であり、育ちの良さを感じさせつつも、性別や年齢、身分に関係なく誰からも好感を持たれていた。

なにしろボーアの反乱で肉親を殺され、四年もの間人質として監禁されていたにもかかわらず、その悲しみや苦勞を一切表に出さなかった。

「リーゼ姫！ 侍女も連れずこのような場所へ、どうなさったのですか」

トーマス王子は素早く姫のもとに駆け寄り、膝間づいた。

「申し訳ありません。はぐれた愛犬を探していたら、わたくし自身も迷子になってしまいました。アダムズ城はとても大きいので、途^と方に暮^ぼれていたのですが、何やら大勢の人の声が聞こえたので、こちらに参りました」

「そうでしたか。ならばその愛犬、私が必ずや探し出し姫のもとにお届いたしましょう。愛犬というほどではありませんが、奇^き遇^ぐなことに私も犬を飼っていますので、その犬たちに探させましょう。私の【犬たち】は鼻が利きますので」

そう言うなり、トーマスはドルトンに目配せをした。

「やれやれ……」

ドルトンはため息をつき、それに気づいたランザムの隊士たちは、一斉にその場から逃げ去ろうとした。

「そうだ！ 良いことを思いついたぞ」

突然声を張り上げたトーマスに、隊士たちの足は止まった。

「リーゼ姫。実は今トウェイン將軍と、あなたの警護について話し合っていたのですが、なかなか話がまとまらず、困っていたところなのです」

「まあ。わたくしの為に、そのような事をしていただかなくとも……」

「そうはいきません。あなたは我が王国にとって、とても大切なお方なので、お守りするのは当然です。

ただ、いつまでも話し合いに時間をかけるのはバカバカしいので、そこをうまく解決する方法として、おもしろいゲームを思いつきました」

「ゲーム？」

首をかしげ、困った表情を浮かべる姫をよそに、王子は得意げに言った。

「はい、そのゲームに勝ったほうが、姫を警護するのです。いかがですか、將軍」

「いったいどんなゲームなのですか？ あまり気が進みませんが、

王子と言い争っていても終わりが見えませんので、その内容によってはお引き受けしてもよろしいですが」

さすがのトウェイン將軍も、姫の御前でこれ以上王子と揉めるのは得策でないと判断し、とりあえず王子の話を聞くことにした。

「さすがは將軍。やはり軍人のトップたるものそうでなくては。では説明いたしましょう！」

トーマス王子はホールの中央にある、鋼鉄製の巨大な球体のオブジェの前に足を運んだ。

「この鉄の球体。誰が何を意味して造ったのかは知らないが、温もり一つ感じさせない無機質なこの像に、私は昔から嫌悪感を感じていた。いつか処分するつもりでいたがその前に、この像の良い使い道を思いついた」

王子は鉄球をコンコンと軽く指で弾き、周囲の視線を独り占めしていることに酔いしれながら、話を続けた。

「聞いた話によると、この鉄球は2トンほどの重量があるものらしい。そこでコルベットの諸君、君たちの中でこの鉄の塊を、得意の剣術で破壊できる者が居たならば、私は黙って姫の護衛役から身を引こう」

突拍子の無い王子の提案に、それを聞いていた者たちは失笑で呆れかえる思いだったが、黙って話を聞いていたトウェイン將軍は、ついに怒りを爆発させ王子に詰め寄った。

「そんなバカな話がありますか！ こんな鉄の塊、大砲でも壊れはしない！ こんな馬鹿げた話、ゲームどころかただの戯言に過ぎません。これ以上はさすがに付き合いきれませんぞ！」

それを聞いていたジュールも、不可能極まりない王子の提案したゲームに、度が過ぎると腹立たしさを感じた。

「いくらなんでもフェアじゃなさ過ぎだ。冗談にもほどがある。なあテスラ、お前もそう思うだろ」

「……」

テスラは無言だった。というより、彼の意識は別のところに向い

ていた。

「なんて綺麗なんだろう……」

「テスラ、お前なに言ってるんだ？」

「リーゼ姫だよ。あんなに美しい人を、僕は今まで見たことがない。まるで女神様のようだ」

完全にテスラは、姫に心を奪われているようだった。

「本当にきれいな人だな。それに顔色もすっかり良くなって、元気そうだなによりだ。テスラは姫の奪還戦に参加しなかったから知らないだろうが、反乱軍が降伏して姫を救出したとき、あの方は消衰しきっていてな。げっそりと瘦せていたし、青白い顔をして放心状態だった。そう言えば、姫は俺たちと同じ歳らしいぜ」

あまり異性について人前で語らないテスラが、我を忘れて美しい姫を見つめるその姿に、ジュールは微笑ましさを感じた。

姫について話す二人をよそに、相も変わらず人集りの中心で、王子と將軍の衝突は続いていた。

「王子、もうそろそろ宜しいですか。あなた様が何と言おうと、姫の警護は我々が行います。それ以上でも以下でもない。姫の御前でもありますから、もうこの辺で終わりにしましょう」

「いや將軍、私は至^{いた}つてまじめですよ。アダムズ王国は、数々の不可能を可能にしてきた。その国を守る最高の集団であるあなた達なら、私は決して不可能では無いと思っている」

「無茶苦茶な屁理屈^{へりくつ}を言わないでください。不可能を可能にしてきたのは科学での話です！」

戦場では、どんな苦境に陥^{おちい}つても顔色を変えたことの無い將軍が、烈火^{れつか}の如く真^{まこと}つ赤な顔で言い返した。

そんな將軍を見て、トーマス王子は少しだけ何か考える素振りをみせた。

「確かに、この鉄球をただ破壊しろと言うのは少々乱暴でありましたかな。では一つおまけを付けましょう」

そう言つと、王子は自らの腰にさげていた雅やかな刀を手に取った。

「この刀はラジアン博士が【神の力】を封じ込めて作ったと言われる十拳封神剣の一つ、名を【蛇之麗正】といいます。この刀は強力な電磁波を発することができ、その威力は百の大砲に匹敵することだ。挑戦者には、この刀を貸して進ぜよう。いや鉄球を破壊できたならば、姫の警護役とともにこの刀も授けよう」

周囲に微かなどよめきが起きた。

【十拳封神剣】は天才ラジアン博士が、今までの生涯で最も尽力を注ぎ開発した十本の刀であり、国宝級の扱いを受けていた。

刀であるにもかかわらず秘める威力は未知数であり、本当に神が封じられているのではと恐れられるほどであった。

その刀を授けるという言葉に、コルベットやトランザムの隊士たちは目の色を変えた。

腕に自信のある彼らだからこそ、王子の掲げた伝説ともいえるその刀が、喉から手が出るほど欲しかった。

だが目の前にある大きく丸い鉄塊を見ると、その現実気が萎えた。さすがに誰もが不可能だと思った。

あきらめの表情を見せる王国屈指の手練れ達に、王子はまたも不敵な笑みを見せ、嫌味の様に続けた。

「どうした、誰か挑戦する者はいないのか。それでもこの国最高の戦士なのか」

不愉快なほど傲慢な王子に、ジュールは心底嫌気がさした。

そんな王子の悪態にまったく気を留めず、今だ一筋に姫を見つめるテスラを見て、ジュールは少しからかう様に言った。

「なあテスラ、お前挑戦してみないか」

「え、なに？」

「王子の提案したゲームだよ。王子の持つてる刀で、あの鉄球を破壊するのさ。そうすれば姫の護衛役と国宝の刀が手に入るそうだ。それに、姫の前で良い所を見せる絶好のチャンスだぞ」

「姫の護衛役！ そんな大切な事、なんで黙ってるんだよ」

そう言うなり、テスラは人込みを掻き分け、王子のもとに歩み寄った。

「お、おいテスラ。本気でやるのか」

冗談半分で言っただけだが、本気になるテスラにジュールは驚き、少し戸惑った。

王子の前に進み出たテスラは、トーマス王子に改めて確認した。

「王子。その刀でこの鉄球を破壊したら、本当にリーゼ姫の護衛役を任せてくれるのですね」

「ほう、アイザック総司令のご子息がお出になられるか。この国一番の剣の使い手として名高い、そなたが挑戦するからには私もそれに応えねばなるまい」

少し下手に言いながらも、不敵な表情はそのままに、王子はテスラに蛇之麗正を手渡した。

国王を親に持つトーマス王子と、軍の総司令を親に持つテスラは、幼少の頃からの顔見知りであった。

幼き頃よりトーマスは、皆を不快にさせる天賦の才を備えており、五つ年下だったテスラは、からかう相手として恰好の餌食であり、幾度となく嫌がらせを受けた。

しかし、なぜかテスラはそんな王子の態度に何の感情も抱かず、また何をしてもしも反応の無いテスラに対し、いつしか王子は距離を置くようになっていた。

ひよんな場所で再会した二人だが、相変わらずテスラは王子に対し何の感情も抱かなかった。

テスラの頭は美しいリーゼ姫の事でいっぱいであり、ただでさえ興味のない王子のことなど、どうでも良かった。

そんなテスラであったが、手渡された蛇之麗正を鞘から引き抜くと不思議な感覚を感じた。

軽く素振りをしてみると、蛇之麗正は目には見えない微小な振動を発生させ、その感触はテスラの体に伝わった。

「……」

テスラは蛇之麿正を手に少し考えている様子だったが、ゆっくりと歩きだし姫の前で止まった。

「リーゼ姫。ここに居られては少々危険です。もう少しお下がりください」

姫が安全な場所に移動したのを確認すると、テスラは鉄球の前に立ち、中段よりやや下目に拔身ぬきみの刀を構えた。

張り詰めるような空気に、周囲は緊張で包まれ静まった。

テスラが醸かもし出す異様な雰囲気^かに気押され、王子までもが息を飲んだ。

ジュールは、目を閉じて集中力を高めるテスラを見つめ、その瞬間を待った。

静かに蛇之麿正は高周波振動を発し始めた。

そしてテスラの集中力が高まるのに比例するかのように、高周波は増大していき、その振動はいつしか激しい電磁波を発した。

「バリバリバリッ！」

目の眩くらむほど光輝く刀身から、凄まじい放電と風圧が発せられ、周囲の者達は立っているのさえ困難であった。

「凄いな。まるで目の前に【嵐】が集約し、留とどまっている様だ」
近くにいるドルトンの声が聞こえたが、ジュールはテスラから目を離さなかった。

風圧はさらに強まり、窓ガラスのいくつかにひびが入った。

次の瞬間、

「くる」

ジュールがそう感じたと同時に、テスラは目を見開き、蛇之麿正を鉄球めがけて振りぬいた。

「ズガガガーン！」

目の前に雷が落ちたような、凄まじい轟音と衝撃が起きた。

ホールの中は爆撃を受けたかの様に何もかもが散乱し、テスラが刀を振り抜いた方向にある壁には、巨大な穴が口を開けていた。

あまりの衝撃で目の前で何が起きたのか把握するのに少し時間がかかったが、ホールにいる者すべてが目にしたのは、紛れもなく粉々に破壊された鉄球の残骸であった。

ただ呆然と立ち尽くす王子。

まさに神の発した一撃の様であった。

いかに凄まじい能力を秘めたとはいえ、たかが一本の刀にこれほどの威力があるなど、だれも想像できないことであり、また初めて手にした刀の能力を、ここまで引き出したテスラの剣士としての腕前に、ジュールは舌を巻く思いだった。

「ま、まさかあの鉄球を…… 本当に、破壊するとは……………」

王子は心が抜け落ちたかのように、力なく言った。

「刀を鉄球に叩きつける瞬間に、電磁波で空気中の水分を加熱し、瞬間的に熱膨張させて鉄球に高負荷をかける。そこに高周波振動を叩きつけば、あとは勝手に鉄球が粉々になるだけです。もし届くのであれば夜空の星でもこの鉄球の様に真つ二つにできるでしょう」
テスラは自らが実践した方法を淡々と語った。

そしてここにいる最高・最強と呼ばれる隊士たちは、それがどれほどの能力であり、決して己では真似できない神の領域と言ってもいい技術を目の当たりにし、脱帽する思いだった。

「トーマス王子、約束通り鉄球を破壊しました。これで姫の護衛役は、我々コルベットにお任せ下さいますね」

テスラはそう王子に告げると、少し離れた壁に半身を隠し、恐る恐る様子を伺う。姫に目を向けた。

「ハハハハッ。真に素晴らしい見事な剣技であったぞテスラ。だが最初に言ったように、これはゲームだ。ただの余興であって、本当に姫の警護を譲るわけなからう」

「何ですと！」

この期に及び言い訳がましく戯言を言う王子を、テスラは鋭く睨み付けた。

その目には明らかに殺気が込められており、それに連動する様に蛇之麿正は高周波を発した。

「やめろテスラ！」

叫んだジュールは咄嗟に自分の持つ刀に手を掛け、殺気に怯む王子の盾となる様に立ちはだかった。

「何を考えているんだテスラ、冷静になるんだ」

視線を交わしながらも、黙り対峙する二人。

テスラの目は明らかに殺意に満ち溢れており、その殺気は王子のみならず、なぜかジュールにさえも向けられていた。

ジュールはその殺気を真正面から受け止め、テスラが思い留まる様、必死に願い信じた。

「そこまでだ、二人とも」

ドルトンは威圧感のある低く重い声で、睨み合う二人に制止を促がした。

そして別人の様に縮み上がっている王子のもとに歩み寄り、赤子を諭すように言った。

「見苦しいですぞ王子、約束通りここは姫の警護を彼らに任せるのです。そしてあの刀もテスラに渡しなさい。彼は正々堂々と、王子のほうから持ちかけた【ゲーム】に臨み、見事それを成し遂げたのです。ここはご自分の言った事に責任を持ちましょう。負けを素直に認め、その相手を心から称賛することが出来る様になれば、今後国を背負うあなた様にとって大きな財産となることでしょう。またそうすることで、あなたの器の大きさを、壁の陰から見守る姫に見知らせることにも繋がるはずですよ」

王子は神妙な面持ちで少し考えた末、潔く諦めの言葉を発した。

「最高の科学と最高の剣術の成せる技か。まあ良い、今回は完全に私の負けだ。姫の警護役からは身を引き、その刀もテスラ、約束通りお前に譲ろう。所詮私がそのような刀をぶら下げていても、無用の長物だしな」

テスラは刀をひき、鞘に納めた。

ほつと胸を撫で下ろし、ジュールは一息ついた。

それでもテスラが、王子はおるか自分に対してまで本物の殺氣を向けたことに、彼は困惑した。

「申し上げます！」

一人の一般隊士が、血相をかえてホールに駆け込んできた。

「ヤツです、ヤツが現れました！ それも二体同時です！ 二体のヤツは王立協会本部の【エクレイデス研究所】を強襲し、【何か】を強奪した模様。その後二手に分かれ、一体はルーゼニア教総本山【金鳳花五重塔】に、もう一体はルヴェリエ中央大路の【羅城門】に現在立て籠もっている様子。また未確認情報ですが、現在も王立協会本部のエクレイデス研究所において、銀色の体をした巨大な翼を持つ【化け物】がいるとの報告も受けています。コルベット・トランザム両部隊におきましては、至急出動お願いいたします」

急転する事態に隊士たちの顔つきは、一瞬にして戦場のそれに変わった。

「まさか二体のヤツは、何らかの目的を持ち、共同で行動をしているというのか？」

今までにない状況に、ドルトンは不安と疑問を感じた。

「その様な詮索は後にしろドルトン。急ぎスクランブルだ。我々はエクレイデス研究所に向かう。お前たちトランザムは、二体のヤツのもとに向かい対処にあたれ！」

有無を言わさぬ勢いでトウェイン將軍はドルトンに指示し、また自らが指揮するコルベットに対しても急ぎ戦闘準備を整え、現場に向かうよう指示した。

ジュールは銀色の化け物について、ヘルツが話したラヴォアジエと呼ばれるヤツの事ではないかと思った。

不確定な情報でありながら、トウェインがコルベットをエクレイデス研究所に向かわせようとしていることが、ジュールの考えをさらに確信めいたものに近づけた。

その時、

「銀色の体をした巨大な翼をもつものとは【大きな鷲】の姿をなさ
つていませんでしたか」

報告に来た一般隊士に、血相を変えたリーゼ姫が詰め寄り問いか
けた。

「申し訳ありませんが、その様な連絡は受けていません。何しろ研
究所は現在その一部が炎上しているらしく、事態が把握しきれない
状況にあります。何処どこからなぜ炎が発生したのかも不明ですし」

「そうでございますか……」

リーゼ姫は落胆らくたんの色を見せた。

「ただ、エクレイデス研究所には、何重もの自己防衛機能が備わつ
ております。逃走した二体のヤツもそれら強力な防衛機能による攻
撃を受け、ある程度のダメージを受けているものと思われます。未
確認の化け物も今だ研究所に留まっているというのであれば、それ
相応の攻撃を受けているはずであり、深手を負いその場から離れら
れないでいる可能性も考えられます。いや場合によれば、すでに死
亡しているかもしれません」

「死つ！　そ、そんな……」

一般隊士の報告に青ざめた姫は、崩れ落ちる様くずに気を失った。
それに気づいたテスラは、倒れ込む寸前の姫の体を抱き抱えた。
そして彼は騒ぎに駆け付けた数名の侍女たちていねいに姫の体を丁寧に預
けた。

「テスラ、お前も早く皆と共にエクレイデス研究所に向かえ！　私
もすぐに行く」

テスラは將軍の指示が耳に入りながらも、少しの間名残り惜しそ
うに姫を見つめた。

細くて小さな姫の体を抱きしめた感触が、テスラにはこの世のも
のとは思えぬほど心地よく感じた。

「全員急ぎS級戦闘配備だ！　目標は逃走した二体のヤツ！」

ドルトンはランザムに対し指令を出した。

「リュザック。お前はランザムの指揮をとり、南方の羅城門らじょうもんに向

かえ。俺はジュールと二人で東方の金鳳花五重塔に向かう」

「面倒だけどやるしかないか。けれど隊長、戦力のバランスが釣り合っていないけどいいんですかい」

ドルトンの指示に対し、リュザックは尋ねた。

酒好きの彼は一見不真面目に見えるが、その実力はドルトンに次ぐものであり、状況判断能力に長けた強者であった。

「五重塔のほうに距離がある上に、この時間だと向かう道が込み合っているはずだ。少数で行動したほうが機動性が良い。ジュールをサポート役にし、俺がヤツを叩く。なにか不満があるか」

「いや、何もありませんで。了解しました」

準備を整え終えた隊士たちは軍の特殊車両に乗り込み、目的地に向け次々に出発した。

まだ夕刻であったが、弱い雨の降る生憎の空模様のため、すでに辺りは暗くなっていた。

ヘルムホルツより渡された最新のスーツと各装備を施したジュールは、ドルトンと共にそれぞれが軍のバイクに跨り、雨の中を五重塔めがけてアクセルを開けた。

ドルトンの予想通り、五重塔に通ずる道はかなり渋滞していたが、二人の操るバイクはその僅かな隙間を、全速力で駆け抜けた。

ルーゼニア教の総本山である金鳳花五重塔に着くと、すでに一般の二小隊が到着していた。

だがそれらの隊士達は、五重塔に入り込むヤツとの戦闘により複数の負傷者を出しており、無事な者も一般市民の護衛と非難補助で手一杯な状況だった。

それでも市民の非難はひとまず無事に完了したらしく、五重塔に人影は見られなかった。

薄暗い雨の中、ジュールは目前にそびえ立つ五重塔を見上げた。ルーゼニア教の総本山として、いつもはその信者で賑わっているはずのこの場所は、今は不気味に静まり返り、ただ雨の打ち付ける

音だけが聞こえていた。

ジュールはなぜか、これから始まるうとしている戦いが、自分の運命に大きく係^{あが}つていそうな気がした。

それはどう足掻^{あが}いても逃れることのできない過酷な宿命であり、踏み出せばもう後戻りできないと直感した。

言葉で表すことのできない不安に駆^かられ、ジュールの足はその一步を踏み出すことに躊躇^{ためらい}した。

「覚悟はできたか、ジュール！」

一般隊士より現状の報告を受けたドルトンは、そう言ってジュールの背中を強く叩き、長刀を背負った。

その刀が間違いなく十拳封神剣の一つであることを、ジュールは容易に想像できた。

そして背中から伝わってきたドルトンの力強さは、躊躇するその一步を踏み出すのに、十分なほどの勇気を彼に取り戻させた。

「行くぞ！」

二人はヤツの立て籠^こもる、金鳳花五重塔^{きんぼうげいじゅうのとう}に突入した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8317w/>

月読の奏

2011年10月10日03時21分発行